

浪花節
佐倉義民傳

098223-000-5

特22-418

佐倉義民傳

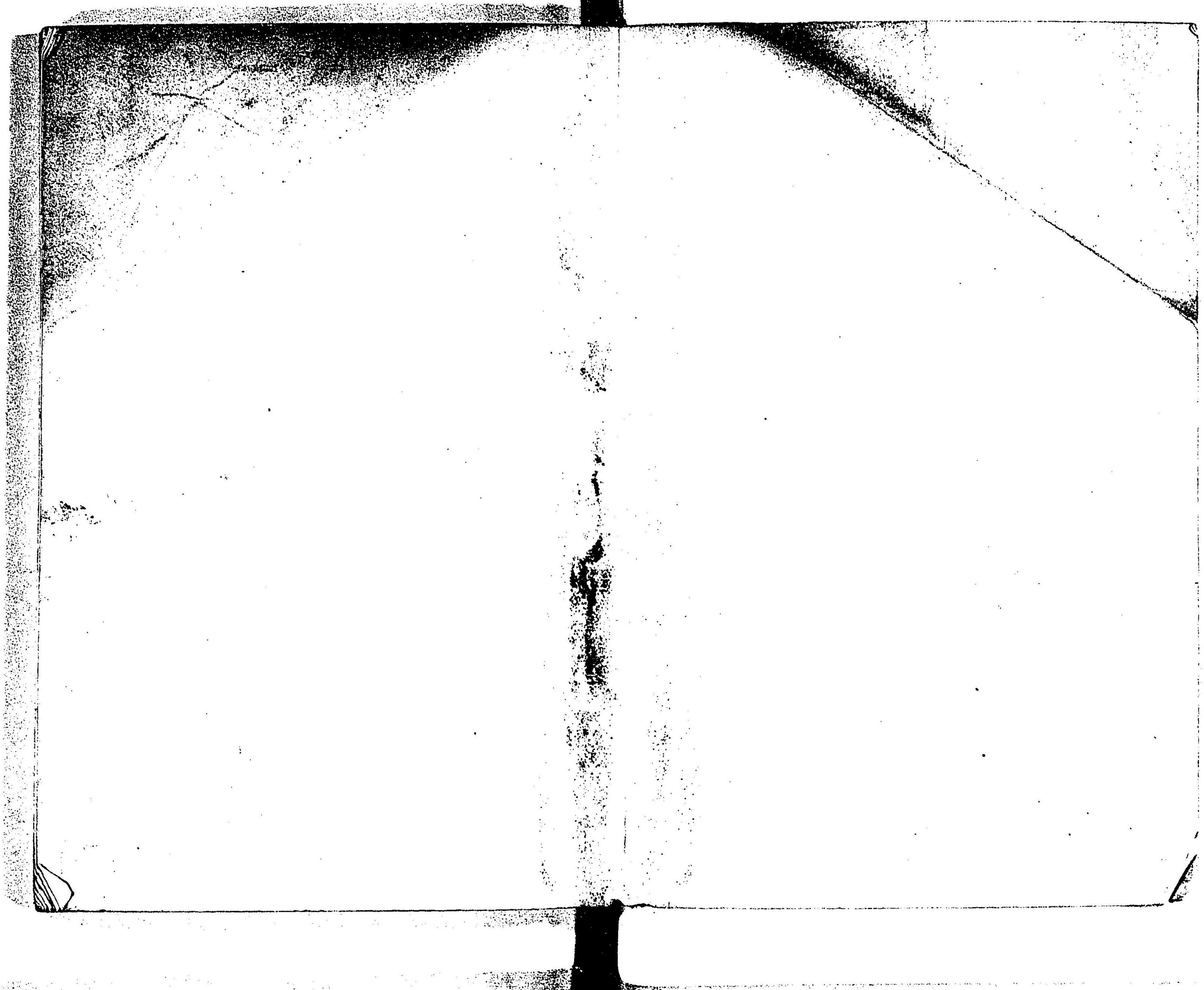
京山 隅右衛門 / 講演

M43

DBU-0077



259
1073



時22

418



明治
43. 4. 14
内交

青 海 堂
三 芳 屋 藏 版

序

諺に義を見てせざるは勇なしと云ふことあり、勇あれど義を見てせざる輩あり、之を匹夫の勇と云ふ。何をか義と云ふ、人の困難を見て之を救ふこと、此れ義なり。されど人の困難にも正と不正とあり。即ち不正を働きたる結果苦境に陥るものと、正道を踏みて災難に罹るものと二つこれなり。表面より見れば寧ろ不幸の輩なれど其の依て來る所の原因を考ふれば兩者の間に黑白雲泥の差あるなり。世に義俠を以て自ら任する徒あり、人に頼まるれば事の善悪邪正を問はず直に之を甘語し、義に依つての助力なり。さて大に豪かれど、義もかくの如く曲解されては定めし迷惑千萬のこさなるべし、かゝる義は之を不義と云ふなり。正は邪に厭倒さるゝ時、正の爲め

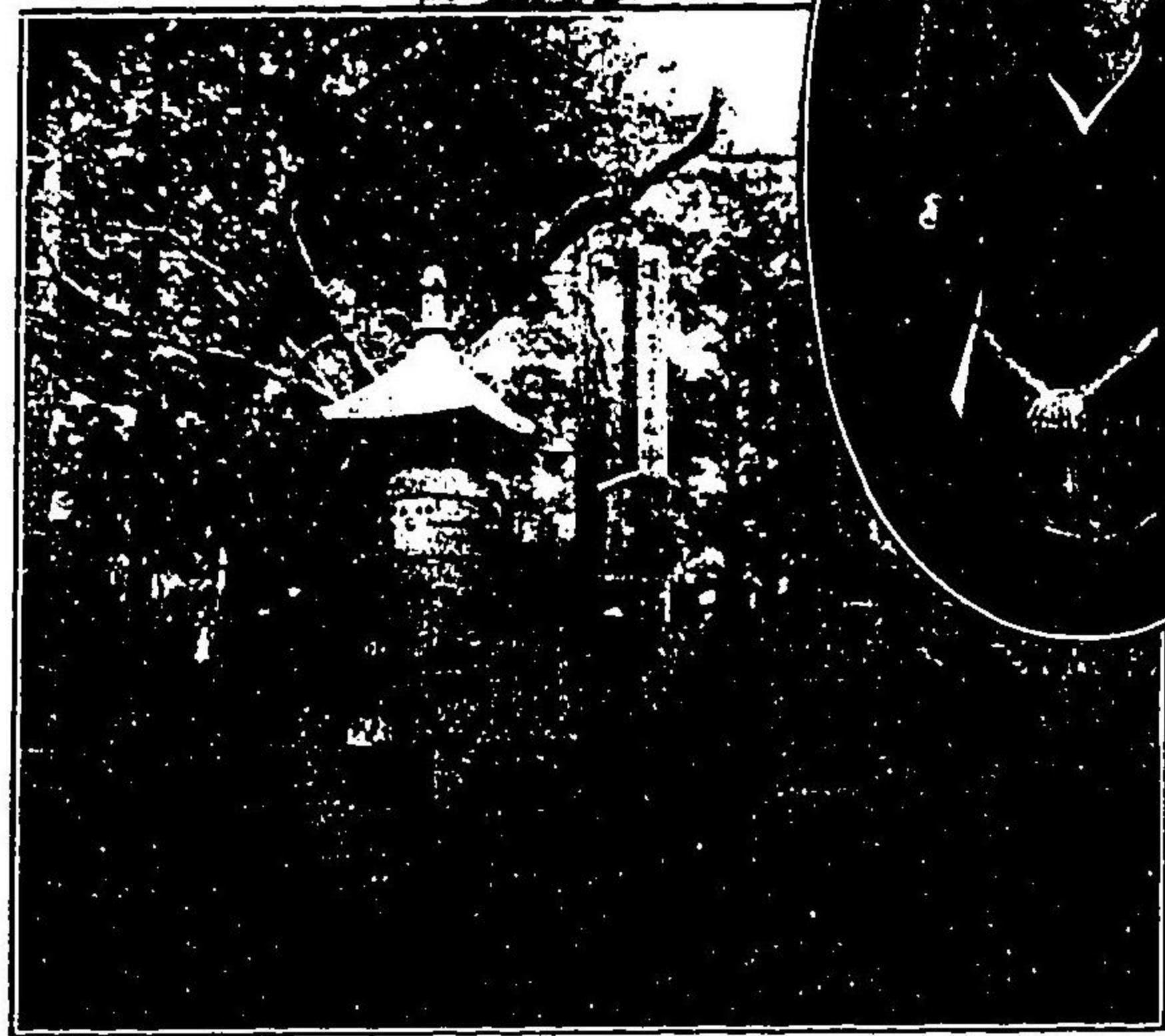
に力を盡して邪を斥くるこれ眞の義なり、之を正義と云ふ。茲に傳せらるゝ
木内宗吾の如き、數萬の村民、領主佐倉殿の苛政に堪へかね、悲惨の境に
沈むを見るに忍びず、家を忘れ妻子に別れ身を棄て、直訴し、遂に村民を救
ふに至りたるが、かゝる仁俠の行ひありてこそ初めて義民と云ふを得べけ
れ、洋の東西を問はず千古を通じてかゝる義民は幾人かある、嗚呼佐倉義民
として赤穂義士と共に永く併稱さるる決して謂なきに非ず。今、回、京山
隅右衛門義民傳を講じて梓に上す、聞く、隅右衛門は齡未だ若しと雖、彼の
莊重なる講演振りは、義民宗吾を活躍せしめて餘す所なかるべしと信ず、
さゝか是を以て序となす。

鬼川漁夫



法屋 繪圖

京山隅右衛門



義民宗吾靈墓

佐倉義民傳

京山隅右衛門講演

浪上義三郎速記

第一

申し上まする、御定連様の御好みに因まして佐倉の曙義民傳の御話を時間の
來たりますまで不辨なる處を申上げまする

「末になりませう事なれば所はたしか江戸の土地、上野東叡山三
代將軍の御靈屋の附近、階段下にて待受て、四代の將軍へ命を的に
直訴なし、夫が爲に二百二十九ヶ村の百姓ごもの命を助け、未だ
に残る佐倉の曙義民傳、木内宗吾の一代記、如何になるか勤め

ませう」

所は下總の國は印幡郡佐倉の城主、本多様の御領地を少し離れましたる處に、大瀧村と云ふのが御坐ひます、村の入口の破た一軒の家行燈の丁字が溜つて薄暗して六十に近き老婆が只一人、我が子の歸りを待受けて居ります 萬阿母さん只今歸つて参りました 萬、オーお前は悴か、今日は御庄屋様の所へ行つたとやら何う云ふ都合でありました 母、へー此の取立じやア何うも喰て行ことが出来なから一層の事御上へ願つて我々どもの助かるやうにしていたい云ふ話を爲しましたが、何を云ふにも對手は上御役人様、此方は高の知れた百姓、何うする事も出来ないから之は泣寐入に爲るより他に無かろうと云ふ、又今日の話も小田原でトウ〜歸つて参りました 母、夫はマア是非なき事で御坐ひます、何分ともに時節を待つて何か一同の助かるやうに爲なければなりません、サア今晚は早ふ就床なさい 萬阿母さん明日になれば成田の大河内様で眺らへられて居た、鯉を二三本持つてゆかなか

ればなりませんから、今晚は寐ないでもつて明日は朝早くより往つもりです、阿母さん貴下は早く睡て下さい 母、イヤ〜然うでない、妾は晝でも睡られる身上、お前は睡ないと明日身体が使へませぬ 萬何に若い時分は二晩三晩寐ませんでも勞れるやうな事は御坐いません、サア阿母さん御休みなすつて下さい、母を寐かして我が身は一人表の方は三疊で、破れか、つた机を出して帳なぞ調べて夜を徹すつもりで机へ凭れて何か調べて居りましたが、其裡に晝の疲勞が今出たかウツ〜と居眠を生じた、母親の聲にント目を覺して見ますれば早や東が白んで居る容子 萬之は阿母さんトンダお世話様で御坐います、是から急いで出かけませう 母、妾が荷物を拵へますからお前は其間に御飯を喫ておしまいなさい 萬、夫では然ういたしませんと萬兵衛がホンの御澤庵の香々で御飯を喫はじめ、母親は庭へ下て目の悪いのも厭はないで拵へましたる荷物 母、悴、荷が出来ましたヨと云ふを聞た萬兵衛は足装束を致しまして、荷を擔いで出んとしたが、不思議なるかな、穿て居た草履の横

鼻緒と向ふ鼻緒が一途に切れる。萬是はをかしい不思議だナ、阿母さん穿たばかりの草履が切れましたヨ。母、草履の鼻緒なぞの切れる時には必ず外へ出て悪い事があるさうじや、今日は稼業を見合せたがよかろう。萬何に阿母さん、ソナ事を氣にして居ては年が年中渡世に出ずに居なければなりません、草履の鼻緒の切れたのは私くしの作りやうが悪かつたので御坐います、何の御心配なさいますナ、夫では鳥渡行つて参ります、草履を穿替へて表へ出たが、萬兵衛はスタク、急いで参りましたのは大瀧村の出はづれの小松林

「遙か向ふの方から遣つて参りましたのは堀田の役人、郡奉行の牧尾越後の手先にて悪黨の名を取つたる山ノ内源吾、夫に列なる二人の手先」

摺違つた、着の荷を傍に下しまして手を突た萬兵衛は萬「御免下さいまし御役人様御苦勞様でムいます、一言述て行かうとするを、源吾はデット見送つて居ましたが

源「コレ待て萬「ハイ 源「お前の其天秤棒は、何か郡奉行の許で毎年焼印をいたいて居る天秤棒であるか 萬「へエ然うで御坐いますとも、昨年のはモー役に立ません、又た今年改めて郡奉行様から頂いたもので御坐います 源「然うか、鳥渡見せてくれ 萬「エ、御覽下さいまし 源「其の方は今年のものだと云ふが、是れは昨年の焼印じやアないか 萬「へエ、借は間違ひましたか、今日は私が寐すごしました。阿母様が御目覺になりまして私の荷を拵へてくれましたが、眼が悪ひので庭の隅に立かけておりましたのを間違へて憊ふ云ふ事を爲たのでムひませう、何うか一ツ今日の所は御見免し下さいまし、夫に今日は是から成田の大河内様まで参るのでムひます、若しや時刻がおくれて間に合ぬ事がムひますと、御得意をしくじるのでムひます何うか今日の所は御見免しを願ひます、私の家は直向ふの大瀧村の入口で二軒目でムひまして、親孝行の萬兵衛の家は何處だと云へば直に分解ます、宅には母が居りますから御出になつて御調べになりますれば今年の焼印の据りました天秤

棒は庭の隅に立かけて御坐ひます。何卒御出になつて御覽下さいまし、必ず御政府を欺かるやうな、不都合な者ではムひません。運黙れ汝の口より私は正直でムひます。新孝行でムひますと云ふを、眞實に受て居る白痴があるか、又汝の住居つて居る所へわざ／＼参つて左様な事を調べる役ではないワ、焼印の違つた棒を所持致して居れば仕方がない、郡奉行の役宅迄引立て参らねばならぬ、サア一緒に参れ。萬何うか御待下さいまし、私は郡奉行の御役宅へ引立られて五日や六日水半の苦しみを致しても仕方御坐ひませんが、後に残つた阿母さんが何うして夫まで生計で居られませうか何卒御情けでムひます御見免しなすつて下さいまし。運相成ぬ、たとへ汝が此所で幾ら詫を爲やうとも此儘見免がす事は上役人として出来ない事である、一緒に参れと云ふなり、持つて居たる赤房の十手を以つて面部を打、面はさけて血は瀧津潮の如く流れ出る、親に孝行なる萬兵衛も、零時無念の齒齧をなして居たが何うもモーヌうなれば仕方がない、親にも打たれた事のねへ面部に疵を受け此儘に

捨置ては男の面が立ねへ、恚ふ云ふ役人があるはッかりドレダケ佐倉領の人々が苦むかしれねへ、領民に成代り思ひを晴らしてくれやう、突然荷の内におりました。出羽庖丁を逆手に取りまして、傍に立て居る役人を望んで突かゝつた、不意に遣られてドツカリ其處へ仆れる、之を見て一人の手先が打つてかゝるを、出羽庖丁を投出して天秤棒を振冠り打下した、鼻を打たれてアツと夫へ仆れる、一人の役人はソレ叶はぬと雲を霞と逃出してしまつた、後に残つた萬兵衛は

「いくら腹立とは云ひながら上役人を兩人まで手にかげ殺した上からは、生て居られぬ吾が身の上、此場に於て死んでしまはん家に残つた阿母様御免しなされて下さりませ、此世で孝行しなければアノ世で孝行いたします親に先立つ不孝の罪、南無阿彌陀佛彌陀佛ご心の裡で念佛を唱へ、今や咽喉を貫ぬかんとする一刹

那、傍より飛で出ました二三人の男コレ待て萬兵衛、お前の容子を傍で見居つた、必ず死ぬるに及ばない、今コッデ死んたらば阿母様は何うするつもりじゃ、是からお前は母親を連れて此の下總の領地を逃げ、常陸の潮來を指て行け、潮來の五郎藏親分、お前の爲には伯父ではないか、親子二人でコ、まで便つて行が宜からうと勧められて、氣の付萬兵衛、左様ならば然う云ふ都合にいたしませうと

『直に其場を立退て一目散に吾が家の方へ戻つて来た』

『母親を連れて立退まして渡し場へかゝり、船頭藤兵衛に此話を致しまするご、藤兵衛は憫然の親子じや助けてやれと船に乗て河

中央まで漕出した、後の方より役人が三四十人皆早繩を手に提て萬兵衛逃なご急ぎ来る』

『オイ、其所へ行船頭、藤兵衛待と呼ばりました、けれども藤兵衛は聞えても聞こえない舉動をして居る、勿論此の藤兵衛は蟹ではいけません、船頭と云ふものは蟹にならなければ都合の悪ひ事がある、船が岸を離れて一間ばかり向ふへ出る時に、後方から馴染の客が来て其船を戻してくれろと云へば、顔を見れば後方に戻さねば仕方がない、夫に就て勝手蟹になつて、知らない顔で先方へ船を着る是が船頭の癖で、況て今日は萬兵衛を乗てゐる藤兵衛だから知らない顔で向ふへズツト行、役人は聲張り上げた、藤兵衛待て、夫に乗つて居る奴は、役人二人を殺した所の天下の罪人である、萬兵衛親子を渡す事は相成らぬ待て

スカシ、チラリと聞た萬兵衛が、聞えても聞えぬ舉動をするのが藤兵衛の役た、親に孝行な萬兵衛を渡してやつて、命を助けてやらな

ければ頼れたる甲斐がない』

漸く船を向ふ岸に着まして 藤「サア兩人の者早く逃げるが宜からう 藤「有難ふ存
じます、夫では御船頭御暇を致しますと兩人は別れてドン／＼逃て行、其跡にて藤
兵衛は今聞えたやうなふりをして、後を回顧り 藤「御役人様何ぞ御用でムいますか
と云つて船をボツ／＼後へ戻して来た 役「藤兵衛其方は善ない奴じや、先刻よりア
レ程呼で居るのが聞えぬか 藤「何だか些とも聞えませんが、今貴下方の御姿を見まし
たから、何うしたのだらうと思つて後へ船を大急で戻して参りました 役「實に其方
は善ない奴だ、汝は驥か、耳が遠ひか 藤「私は耳が遠ふムいますヨ 役「困つた奴じ
や今乗た萬兵衛は上役人を兩人まで殺した罪人じや 藤「へエ悪い奴でムいます、御
役人様兩人を殺した悪ひ奴と知つたらば船を向ふへ遣るのではムいませんでした
役「今更ソンナ事を云つても駄目だ、汝が逃してしまつたのだ 藤「少しも知らぬ事
でムいます 役「早く向ふへ船を出してくれ 藤「三十何人此船へ乗のは危ふムいます

中央頭で轉覆るかも知れませぬ 役「險呑な船だナ、何構はぬから一ツ漕つてくれ
藤「中央で轉覆つても宜ふムいますか、宜ければ御乗り下さいまし然し御役人
様少し待つて下さい、朝から飯を喰ふと思つて居りましたも喰ふ暇がムいませぬ、
辨當を鳥渡喫ますから少し待つて下さいましと上へ上りまして取出したる行厨をボ
ツ／＼喰はじめた 藤「何だつてコンナ堅い澤庵を入れたのだらう、をかした澤庵だ
堅いので喰はれやアしない、婆アどんは毎々でも俺に柔らかい處を入れてくれるが
今日に限つてコンナ堅い澤庵を入れて 役「藤兵衛無益言を云はんで早く爲ろ、
藤「宜ふムいますか鳥渡待て下さいまし、ボツ／＼喰はじめた、ゴテ／＼云ひなが
ら喰じまいました 藤「旦那鳥渡便所へ行つて参ります 役「然グズ／＼しては困るな
藤「ダツテ、旦那、出もの腫物でムいます處嫌はずでムいまして、鳥渡便所に遣つ
て下さいまし、其が御氣に召さずば船の中で皆さんの頭の上から遣かも知れませぬ
役「尾籠な事を云ふ奴だ早く行つて参れ 藤「宜ふムいます、便所へ参つて悠々と構

へ用を達 鷹サア旦那遣りませうと船を向ふを望んで出し始める、御話は一轉親孝
行の萬兵衛

フシ「親子兩人は手を引いて住馴ましたる生れ故郷の下總を後に眺
めて段々逃て來たのが、旅馴ぬ常陸の潮來を目懸て参ります
其附近なる利根川、あの傍まで來て、鳥渡前面を見ますれば、三日
前より川留の船一艘も見えませんが、後ろよりは追來る役人、親子
は渡たるに渡られず、捕縛られるより一層死んだが増じやと、袖
や袂に小石を入れて、利根川望んで飛込んこいたす處へ、後方よ
り飛んで來ました一人の男、二人の者を助けてやり、容子を聞け
ば潮來なる、五郎藏さんの其家へ往この話を聞まして、五郎藏と
云へば俺の親分だ、如何にも見送りいたしませうと、何れより求

めしか舟を一艘持つて参り、二日前より川止の其中を乗切り、潮
來なる漁夫町にと参りました、五郎藏は委細を聞て大に驚き然う
云ふわけなら、俺の家に悠々居るが宜からうと兩人の者を隠匿
た

五郎藏は若者を招で、五「ヒヨット爲と、下總の方から役人が押て來るかも知れね
へが、若遣つて來ても、一人として此潮來の町に入れる事はならねへぞ何奴も彼奴
も叩ッ殺してしまへ、若宜ふムいますと若い奴は大勢揃て、持出しました四斗樽の
蓋を脱て酒を飲、若「佐倉の役人が來たら辛苦い目に會はせてやらうと町の入口なる
藪影に待受る、處へ役人どもは三四十人押て來るを、五郎藏の若い者が飛出して突
然役人に打つてかゝる、不意をくらつて役人どもが夫へ仆れた奴を、乗かゝつて後
方手に捕縛つた、若「サア役人來いと引立る、何うも不思議な事があるもので、召捕
に來た者が召捕られた、若「サア一緒に來いと引立られて參りましたのは利根の河原

者「ヤイ佐倉の小給役人、アンナ親孝行の萬兵衛を汝に渡して何うするものか、洒落た真似を爲やアがるナ、此後潮來の町へ一寸たりとも足を入れて見ろ、向ふ艦をかつばらつてやるから然う思へ、サア今の間にトット、歸れ、是から役人を舟に載て前面河まで送り届けて 者「コ、ハ汝たちの御主人、堀田様の御領地だから、心の向次第勝手に行が宜や、然しわざ／＼潮來の町まで來たのだ、何一ツの御馳走を出さねへのも氣の毒だ、一ツ御馳走してやるからと砂を取て口の中へ投り込む、役人は手が後方に廻つて居るから何う爲る事も出来ない、砂を噛ながら這々の体で下總佐倉を望んで立歸る、此事を郡奉行に申し上げる、牧尾越後立腹いたして潮來の郡奉行にさして此事を紹介た、郡奉行の方より何の返事も無い夫故佐倉の御城代奸惡輩の發頭人、杉山彈正より、水戸の附家老中山備前守様へ萬兵衛を御引渡し願ひたいと申し出た、中山備前守は追て返答いたすとあつて其儘何の沙汰もない夫故杉山彈正より江戸表の黒船町の御上邸に居らせられる堀田上野介様へ此事を申し上げまし

た堀田上野介立腹いたし、或朝の事御駕を仕立て

「おのれ憎き水戸の家來、我が身御城へ乗込で、副將軍に御願ひ致し、萬兵衛親子を受取つて、夫たけの處刑に行はずはなるまい
 黒船町を跡にして千代田の御殿へ御登りになり、光國公に御目通りをいたしまして、此話を爲すの一段如何なりませうか、
 何れ次回に、

第二

「只今までも今までも讀で殘せし御手續き」

鳥渡御客様に御理解をいたして置まするは、下總の農民どもの言葉とは大に違つて居りまするが、下總印幡郡佐倉邊の言葉で申し上げて居りますと、會話に情がう

つりませんで、高座通語を以て御披露いたしますから、何卒御心算で御聞濟みを願ひます

堀田上野介千代田の御殿へ御登城に相成りまして、茶坊主を招び 上時に茶坊主や、水府侯最早御見えになつて居るか 坊早朝より御登城でムいます 上左様か、堀田上野、御目通り致したいと鳥渡然う云ふてくれ 坊承知いたしました、茶坊主の珍念と云へるもの水府侯へ此事を申し上げます、光國公御聞なされて、云はずと知れた萬兵衛の一件に相違あるまい、國表中山備前の許より委き事は通知ありしが堀田上野は如何なる事を申し出すか殊に因は篤と意見してやらざるまじと思はれました 水苦しゆうない此所へ御通し申せ、上野介恐るゝ水戸侯に御目通を致しました 水「オ」苦くない、近ふ御寄なさい 上「有難ふ存じます、今日は御願ひがあつて御目通いたしましてムいます、私の領地大瀧村の農民萬兵衛と云へるもの役人兩名を殺し國表を發足なし、只今にては常陸の潮來に住ひ致して居との事、夫

に付まして 上「毎々私國表より度々萬兵衛御引渡下さるやう御紹介いたしますれど、今に於て何の御答もなく此件を此儘に捨置ますれば下總一般の不名譽にもなりますれば、何卒萬兵衛親子を御手渡の程を願ひ奉ります、水府公ニツコリと御笑ひ遊ばしました 水「其儀は先々より承はつて居る、なれどもが、其萬兵衛と云へるものは實に親孝行者であるよし確に承知いたしました、夫が役人を殺したのであるから、能々我が身に考える事があり、堪忍の緒が切れて殺たるものと思はれる、況や此頃は下總印幡那の佐倉の政事は苛重やうであると云ふ事は日本到る所まで聞えある高の知れたる小前百姓の一人や二人の事に口出し致さず、十五万石の政治に口出し致せ、上野、目通り叶はぬ控へ居れ、御叱りを蒙りまして上野介、おのれツと思ひましたが、相手は副將軍の光國公、鷹と雀の争闘もならず、是非なくいたして、黒船町の上邸へ戻り来る

フシ「替る話は萬兵衛が伯父の五郎藏の其許で、毎日日々世話にな

り、遊んで居るも何ごやら母と二人が一軒の家を借、今まで手馴し魚商を渡世にいたして、潮來の町をアチコナラと賣歩行、困が温順人物にて、次第に御顧客が殖て商賣繁昌、今日しも來たる町はづれなる小春屋と云へる者着屋の表より』

萬「旦那御免下さいまし。〇」オー萬兵衛さんか、能來たマア此方へ御入んなさい。萬「有難ふ御座います、今日は少し残りまりましたのですが何うか買ふておくんなさい。〇」ア一宜ともく置いて御歸りヨ、幾金だ子。萬「何幾金でも宜ふムいます勘定は又一緒に頂きます。〇」然かね、一吹吸つて御歸り。萬「有難う存じます、店の上り端に腰を掛けて頻に煙草を出して吸て居ります、所へ表へ參りましたのは二人づれの旅人、内部へ入りまして、何か小肴を取つて飯を喫初めた、一人の旅人が話すには。△「何とも惘然なものではムいませんか下總の百姓どもは、頃日の困つて居るは又格別の事で、何を云ふにも嫁入り婿取り、死ぬ御芽出度が有つた度毎に御上へさ

して御金を出し其上盤一疊に就てゐくら丹後天秤棒鋤鍬にも租税を取られ、傘一本にも何程と云ふ税が出るし、ソナ物までも運上を取揚られては下總領分の百姓は生てる事は出來ますまい、夫に付て二人を二人叩ッ殺した者が逃げてしまつたので其村の御庄屋さんが何でも名捕れてしまい、然して郡奉行の手にかけ、近々の裡に磔罪にかゝるとか、何と哀れなものではムいませんか、コンな壓政な事は世の中にありますまい、夫を思ふと常陸などは眞にツヤ、カナものだ、コンナ最善な御政治はありません、と話を爲るやつを何心なく立聞て居りました萬兵衛が顔色變て魚の荷を擔ぎましたか思案ながらに我家に戻つて來る、母は然とは知らず。母「オー萬兵衛宜戻りなされた、今日は何うでありました。萬「ハイ魚は悉皆賣れました。母「夫はマア宜い都合でありましたサア御飯を喫なさいと母が膳部の支度をする親子兩人が差向ひ御飯を喫はじめたが萬兵衛は箸は取つたが喫る心もなく御膳の上へホロリと涙を流したやつを看めましたる母親は。母「コレ萬兵衛、お前は太層今日は心配らし

い顔をしてゐるではないか、何で心に思ふ事があるならば母に慙ふじやと明して下
 さいまし親一人子一人の仲じやもの、遠慮氣兼ねのあるものじやない、質ねられて萬
 兵衛が「阿母様夫じや御話を致しませう今日旅人の話を聞に慙ふく斯やうなわ
 けで、御庄屋さまが召捕られて磔罪にかゝるとの話し、何うしたものでムいませう
 と云へば母はニツコリ笑ひ 母「コレ萬兵衛お前ソナ事を心配して何うする、無益
 事を心配して身体に障碍つてはなりません、アノ村に住む頃はお庄屋様は大事な御
 方であつたけれども今慙ふして潮來に來た上は、無關係の他人の御庄屋様死のふと
 生やうと心のまゝ、妾ども親子が長命して氣樂に暮すが何より幸ひ、サ、御飯が終
 ふたらば安眠ませうと日頃の慈悲に引かへて無情なる母の言葉に不審を打つた萬兵
 衛、然し親の言葉に背は不孝でムいませう故 萬夫では阿母様御休みなさいましと
 母を臥さして其年二十九才になつて未だ女の肌を知らず只親に孝行と言ふ事のみを
 心掛て居る萬兵衛、御眠みなさる母親の足よ身体と撫擦る、暫く爲ると母親はスヤ

くと御熱眠になりました 萬「ドリヤ阿母様が眠んだ間に俺も一寐入りいたしませ
 うと表坐敷に参りました、薄ひ夜具を一枚冠り萬兵衛が寐やうとしたが
 フシ「寐ても眠られぬ心の裡、さぞ今頃は牢舎の中で如何なる苦勞
 をして居るか、定めし我々親子の者を恨んで居るに違ひない、阿
 母様が無ならば、俺が飛込み、御庄屋様を助ける爲命を捨てしま
 うなれど、只一人の母親を見捨て行は不孝なり、義理を立れば孝
 ならず、孝行すれば義理立ず、如何はせんご心配の、次第に更る
 眞夜中頃、遠くに聞ゆる鐘の音は、何れの寺で鳴すやら、諸行無
 常響きけり」

萬兵衛は此間にフト氣が附て見ますると奥の方で何か物音が爲る、何であらうと
 起て來て破れた襖を排まして、ヒヨイと中を見ますると母親が起て俯向て居る容子

でムいます、阿母様何所が御悪ふムいますかと近寄て見ますれば白布を以て膝を捲、打倒れても卑籠な所を出すまいと云ふ用意、何所にあつたか懐劍で咽を突て苦んで居る 萬「ヤッ、阿母さん何う爲さいました、貴下御氣でも違つたのではムいませんか、と云へば物も云はいで悴之をと云つて手で知らず、ハツと其方を見ますと一通の手紙がある封を押切つて讀で見れば、お前は何卒命を捨て御庄屋様を助けて下され、人間は恩を受けて夫を忘れ、ば人面獸心、人畜生と皆が云ふ、たとへ百姓の我々どて恩を忘れては濟ませぬ、此母が生て居つたらばお前も心にかゝり所詮十分の事は出来まいと母は此場で死ぬる程に、必ず恨んで下さるなど書てある、見て取りました萬兵衛はホロ／＼涙を流しまして 萬「阿母様然云ふ御心でムいましたら、何故先刻に云ふて下さいません、然うすれば貴下の御身は伯父さんに頼んで私は安心して命を捨てましたものを、御自害とは短慮事ではムいせんか阿母様と耳の傍に口を寄ツア／＼泣叫んで居る、苦き息を吐ながら母親は 母「悴、早く妾の首を……

萬「ハイ心得ました、苦痛を免らせませうと云つて百姓の家とは云ひながら親の代より傳はる旅刀を持つて立上り 萬「御免下さいまし
 ワン「『三千世界の世の中を探すこても、何程親が免せばこて、我が親の首打取るやうな、邪見な悴が、世に復こあるべき事でムいませうか迷はず成佛なされて下さいまし、一聲残して切下さんごなしたるが、刃が鈍り、切事出来ず、思案をなして居る所へ』
 何所からともなくドンと鳴つたる一發に、アレと驚ひて見ますれば、母の胸部を射抜たり 萬「イヤ俺の阿母に鐵砲を射つたのは誰だへと向ふを見ると、窓から顔を出したのは伯父の五郎藏 五「ヤイ萬兵衛、委細の容子はコ、デ聞た、とても汝じやア首を取る事は出来めへと思ひ、俺が鐵砲で射つて行つた、サア後構はずに早く行

け、死骸の始末は俺が爲てやると云はれて萬兵衛が、萬夫では伯父さん跡を御願ひ申しますと残り惜氣に母の死骸を後になし

「下總望んで駈出す」

「下總さして来て見れば、哀れにも御庄屋様は萬兵衛を逃しましたと云ふ其罪で、郡奉行の手にかゝり、牢舎の住居となりまして、磔罪の當日來たつて、夫が爲に、裸馬に乗せまして、前ご後に役人が二三十人取巻で、刑場に急ぎ行、夫を聞附け、命を的に駈込で、何卒其御方には罪が無い、御役人を殺しましたは此萬兵衛で御座いますと、庄屋を助けて我が身を捨る、親に孝行な萬兵衛が命を捨てたばかりに、下總印幡郡佐倉なる、堀田の御家の大騒力、木内宗五の顔出しは次なる段で申し上げます」

第 三

「此所は下總佐倉の城下、其頃名代の東國屋五兵衛とて苗字帯刀を許されたる十萬兩の財産家」

表へ参りましたる役人が招喚状を入れて立歸る、東國屋五兵衛不審顔に、其招喚状を開いて見ますると、直に町奉行の許まで出ると云ふ御達し、面倒だとは思ひましたか、悴を招まして、五ノウ悴や、到底碌な事じやアあるまい、又俺にさして御用金を云ひ付るに違ひない、マア行だけは行つて見ませう、羽織袴で直に参りましたのが、町奉行の役宅、早々白洲へ通される、奉行時に東國屋、今度汝を招出したるは他儀でない、未だ御上より御達しはなけれども、其方を惘然と思ふ故、拙者より申してやる名字帯刀を免されたる其方の事ではあるが、成程以前佐倉の御領主には夫だけの功があり、名字帯刀を許されたであらうが、御代替りなつて、堀田侯の世と

なつてからは何の功もなき其方である、夫が爲に名字帶刀共に御取揚げにならんと先日御城代の許で御話があつた、夫では惘然であるから、其方の心得までに申し聞かせ置何とかいたして元々通りに相成るやう致せ、云はれて五兵衛は不審に思ひまして早々我が家へ戻つて来た、家内の者を寄集めて「五」サア大變な事が出来た、今まで續ひた川北の名義を取上げられる事になれば先祖代々の位牌に對して申しわけがない是は何うと加して献金でもして元々の通り名字帶刀を許してもらはなければなるまいと其頃千兩と云へば中々莫大なもの、其千兩の黄金を持参いたして町奉行の許へ参つて話を致し何卒前々通りになりますやうと願つて出た、其日は退り御沙汰のあるのを待受る五六日經と町奉行の許より御達しがありました直に出頭せいと云ふ、東國屋は奉行所へ参つて目通に及ぶ、奉行「倍て五兵衛今度千兩の献金いたしたに就て、御上格別の御憐愍を以て名字帶刀を御許しに相成るから、有難心得る」

五「有難ふ存じます、奉行」夫に付て、明日御城代杉山彈正殿の許へ参るやう、五「有

難ふ存じまする喜んで立歸る、翌日になり、衣類を改めて杉山彈正殿御邸へ参りました、ヒヨイと上坐を見ますれば杉山彈正を始めとしたし郡奉行町奉行御目附役、皆歴々の衆居並び居る、末席へ兩手を仕へました、彈正聲ひそやかに「杉」時に東國屋五兵衛、今度名字帶刀を其方へ許すに付て、一の役を申し付る、今年より樹座元締役を云ひ付るから有難御受いたすべし、五兵衛實に悦んだ、樹座元締と申しますと御案内の通り、其時分は皆百姓より米を以て租税は納める、其御米を一々元締の許へ持て参ります、コ、デ取集めて其上御領主へ差上る、云は「御年貢の御取次を爲ると云ふ大役でムいます、最も名譽の話でムいますから、東國屋は身に餘るの大役御受いたしますと、涙を流して御受いたしました杉なれども五兵衛、毎年角枿を以て取上げるが、今年より改めて桶枿を以て取揚る事にいたす、此の寸法書を持つて歸り、其方の許にて拵へるが宜からうと仰になる、五「心得ましてムいますと急ひで歸る我が家の

「家内一同は喜んで職人ごもを雇ひ込、裏手の方に小屋を建て頻りに柵を拵へる、或日の事で御座ひましたが、同じ柵の職人で高慢屋と云はれたる、藤吉と云へる男が不審顔」

○何だツて貴様は怪訝な顔を爲やアがつて首をひねつて居るのだ、又ボツと高慢を行らかさうと思つて居るんだらう 藤「イヤ然ではない、何うも不思議だ」
 ○何が不思議だ 藤「だツてお前、コンナをかきな事はあるものじゃアねへ、何故だへ」
 ○此柵は何う考えて見ても普通の柵より大きいぜ 藤「馬鹿な言を云ふなへ、貴様の考違ひだ、角柵と丸柵とは違ふ、目で見て分解かへ、御城代様始め御役人様が寄合拵へたものだ、間違ひがあるものか、無益事を云つて御當家の旦那に御叱りを受るナ 藤「イヤ何うしても二三合一升につひて違ふやうに思ふが」
 ○ソソナ言を云ふものじゃアないと云つて居る所へ、東國屋五兵衛が参りました 五「オイ遊んで居てはいけない 藤「イエ旦那器物が大きいのでムいます 五「夫はお前の生れ損な

い 藤「元談云つちやアいけません、其代物ではムいませぬ 五「何だへ 藤「此柵が大きいのでムいますヨ 五「柵が大きい、何故大きい 藤「何故大きいと云つて一升につひて二三合違つて居ります 五「馬鹿を云ひなさるナ、御城代様より御沙汰があつた、其寸法に間違ひがあるものじゃアない、サア夫じゃア一番計つてお前に見せてやるから夫から、普通の柵と計り比べて見ました所が、コソも如何に一升到付て恰度二合づゝ違つて居る、是所謂二割増なる柵である、驚ひた東國屋五兵衛が 五「皆々少し待てくれ、職人を待して置いて、其儘奔で参りましたのは町奉行の邸なり 五「先日御受仕りましたアノ柵の寸法は違ふて居ります、二割増なる柵でムいます、アノやうな柵で取揚ましては小前百姓如何なる立腹をいたしますか知れませぬ又私の家にもかゝはります、依て今度の柵座元締は御断はり申します、町奉行田中惣左衛門之を聞てニッソツと打笑ひ 田「イヤ其儀は必ず心配いたすでないぞヨ、たとへ汝の家へ如何なる百姓が立腹いたして参るとも、當日は役人ども出張いたして一々此方

より申し開き致すであらう、心置なく取計らへ、若し汝相談に参り候時は之を渡して安心させてやれとの御城代殿御直筆御判の捺たる一書あり、其方の迷惑に相成らぬ書附じや、有難之を持参いたせ

フシ「仕方がないで東國屋、不審な事もあるものたご思案ながら

に我家へご戻つて参りました、其上職人に柵を拵へさせた」

出来上りましたる其柵で彌々年貢米を取揚るとなつた、當日には領分小前百姓又は名主等が年貢米を持つて参りますので、馬の背を借て持つて来るものもあらば、中には車に積で段々遣つて来る者もある、天秤棒の折る如く擔ぎ込で来る者もあると云ふ大騒ぎ、東國屋五兵衛の表は何百人と云ふ百姓、我先にと急ひで参ります、東國屋の表の方には高張提灯を四個、柵座元締役川北五兵衛と記し、内に入る所には幕をズツと張まして座へ入て見ますれば役人ども皆々出張いたして居る、役人は役「コレ富田村の作兵衛の小前ものは居るか、富田村より先に持て参れ」○心得ま

してムいますと持つて来ました、米を量ると不足 役「コレ除程足りないぞ、恰當一石八斗二升と云ふもの足りない、克調べて後の残りを持つて参りますやう」○不思議な事がムいますナ、私どもは家で二度三度量りまして其上村一同寄り合て計た事でムいます間違ひはムいませぬ 役「黙れ、上に於ては正確なる柵を以て計つたのじや、夫で足の故足ぬと申したが何とした、所謂なき事を云はずに不足の米を持つて参れば善、猶豫いたし居れば水牢の苦みをさせるぞと威赫されて百姓は不審顔をして表へ出て来る、今度又他の村の者が米を持って行と亦是も足りない、行ものも行ものも足りない」と云はれるので表で寄合を始めた ○「困つたものだな、何うしたものだらう、ナンで這様に足りないのだらうと云ふと一人の男が、今皆さん何ですヨ、アノ柵が違ふやうに思はれる、毎年角柵であつたが今年は丸柵ではムいませぬか、何うもあの柵が違ふだらうと思ひます ○然し日本國中何所へ行つても柵に相違のあるわけはない、何しろアノ丸柵といつもの角柵と比べていたいかうではムいませ

んか △夫では御役人様へ御願ひいたして見やう、と云ふので大勢庭へツロく入つて参りました ○御役人様へ御願ひ申します 役何だ ○他の事ではムいませんが慥ふ足ないと云ふのは不審でムひます、何卒いつも御用ひなさいます角樹と其丸樹とで此の米を計りくらべて見とふムひます 役黙れ左様なる勝手の事は出来ぬ、コレハ御城代様とも相談いたし、尙江戸表の殿様に御伺の上いたした事、計り比べると云ふ事は出来ぬ、不埒な事を申す奴だと刀の柄に手をかけられて、百姓どもは驚ひて表へ逃出した ○困つたナ何うしやう △イヤ御心配なさいますナ、お前さん達が逃て来る時役人の後の方にあつた樹を一ツ盗んで来ました、之と計り比べて見たら宜ふムいませう ○夫ではと丸樹と自分どもが持つて来た樹と計りくらべて見ると、二割程違つて居る △此の奴郎、何と云ふ事を爲やアがつたのだらう、大體悪い奴は東國屋だ、彼奴が樹座元締になつたから慥ふ事になつたのだ、五兵衛に掛合へと大勢の百姓どもツツと云つて東國屋の家へ暴れ込む、東國屋はサア大變で

あると例の書付を持て五兵衛は表へ飛で出まして 五皆さん待て下さい、コレは私
が知つて爲た事ではない、御町奉行と御城代様より慥ふ云ふ書付を貰つて置たから
と云つてもソナナ事は耳にも入らない、家へ踏込で参りました、五兵衛の妻には驚
ひて逃出す慥ふなるぞ出張して居た、役人も逃出した、百姓どもは座敷へ行つて衣
類を取出して引さく踏裂と云ふ塩梅でムひます、命藏の網戸を打破つて中から小判
を掴み出し夫を往來へさして撒と云ふ、恰も黄金の雨が降やう ○金を取つてはい
けねへ盗人になるから取るなと云ふが懐中へ捻込む奴もある、今度は米藏にさして
飛で来て米を曳すり出して表へ引張出し油を持つて来て米の上から撒ると云ふ、二
度の役に立ないやうにさんぐに暴れ廻つて居りましたが、是から酒藏にさして参
りました、最も東國屋では造り酒屋も致して居つたのでムひます、藏へウンと酒が
仕込である、其酒の入つて居る底へ穴を開たから酒がドゥーと流れ出して、宛然瀧
のやうトウ／＼東國屋の家は鳥籠の如にいたし、テ二手に別れて一手は町奉行を

指て行、一手は御城をさして押寄て來と云ふ大騒ぎ、其時城に居た人々はソレ大變と弓矢を番へて切つて放す、飛道具では敵はぬと百姓が搦手へ廻つて來た轉る話しは元來御城代を御勤めになつた堀田大和と申し當時は御隠居であるが、今日しも庭先の方に澤山なる鉢を並べて、夫を手入て御樂をなされて居ましたが、フシ「ワア〜騒ぐ人聲に、御老人は云ひながら、耳に入んで驚ひた何事なるかと家來を招で御尋なさる』
家來の佐仲太と云へるもの、佐「何事か存じませんが、百姓ども一揆を起し、大手より責め寄るものもあれば搦手より押寄るものもムいまして、如何なるかと皆心配をいたし居りますと、之を聞かれて大和殿は大に驚き、コワ一大事なり、捨置難し、是より拙者が乗込んで仲裁いたさねばなるまいと、馬に御乗りになつて大勢騒ぎ居る所へ駈付 大「百姓ども暫く待て我こそは堀田大和なりと云ふと 巨「百姓が何を吐しやアがるんだ、大和だつて和泉だつて河内であらうが攝津であらうが御殿内

の奴が残らず出て來ても待事は出來ねへや馬鹿役人どもにコンナ事をされて百姓が生活て居られるかと騒を年老つた百姓が 巨「マア待つてくれ皆の衆、堀田大和様は實に以前は良人であつた、御城代をして居られた時分には俺達を哀憐で下すつた、物の没分曉人じやア無へ亂暴な事をしてはならねへと云はれて一同後へ退く、大和殿は馬を進められ 大「百姓ども何等が爲に一揆を起した近ふ參つて申立ると御尋ねになりました、何うだへ次郎右衛門、お前行つて申し上げては、何うだへお前はいつでも能喋べるから申し上げてくれ 大「折角だか何うも此頃は口が痛んで喋る事が出來ねへ。困つた奴郎だナ、誰が出て行つて云ふものはねへかと云はれても百姓ども元來口が訥から誰一人として出るものが無い、其中に居た年老株が一人夫へ出まして 考「大和御前様
フシ「小前百姓どもが一揆を起しましたる其理由は先年來より取立の嚴しき事は云ふまでもなく、嫁入り婿取り、死人悦び事があ

るにつけても、御上には夫相當の献金を取り上げ、丹後鋤鉄傘一本疊一疊に幾何こ云ふ租税を取上げて、水吞百姓こ申し上まするが水も吞れぬ今日の場合、況て今日御年貢を持て東國屋五兵衛の家へ行ましたれば、今迄の京柵こは事違ひ、新に作り上げたる桶柵を以ての御取立て、量り比べて見まするこ、京柵よりは二割増此の様な事を致たされては、所詮其日を送る事に相成らず、一層の事に死ぬるが増こ皆々心を定めまして、悪ひ事こは知りながら百姓一揆を起しました、よろしく御願ひ申しまするこ、涙を滾して小前の者が土に喰ひ付ばかりにして泣入りまする、見るも哀れな容子を御覽なされて大和殿、憫然な事じやぞ、悪はせぬぞ皆

な今日は引取れりこ百姓どもを歸して置き、ハテ心得ぬ城代家老アノ杉山彈正め、是だけの騒動あるのに何等が爲に口出したさぬぞ、キツト我が身が意見を致してやらねばなるまいこ、杉山彈正の其家へ堀田大和が乗込んだ、哀れなるかや大和殿、悪人杉山彈正の奸策で、茲に毒殺せらるゝこ云ふ、涙で袖を濡すやうな哀れな話は次の段」

第四

フシ「偕て此の時に大和殿、百姓共の話しを聞いて大ひに驚き、すて置ては堀田領地の惑亂こ急ひで来る杉山彈正が屋敷なり」
我が身の爲には娘の婿たる杉山彈正、何んの遠慮もなく奥坐敷に通りました、彈

正出迎ひを致し、杉是は御舅御にムいませるや、何んの御用あつて御越し下さいましたるか、杉杉山彈正能く聞け、其方不心得者なるぞ、百姓一揆を起し、堀田家の騒動を惹起すと云ふのは城代家老の大役をもつて居ながら、何に一ツの口出しも致さぬと云ふは、何等が爲めである、夫れでは城代家老の大役は勤まるまじ、以後は謹むが宜しからふ、夫れに就けても百姓の申立には、毎年取立嚴敷殊に今年の榊は二割増をもつて取上げられる、是にては百姓露命を繋ぐ事出来ず、是非なく百姓一揆を起したとの申立であつたが、汝存知てケ様な事を捨置くや返答を致せ、杉山彈正之を聞て、杉コハ思ひも寄らぬお言葉、私左様な事は今迄承はりし事はムいませぬ、夫れは東國屋五兵衛と申すもの、今年より榊坐元締の役を申付けました故五兵衛策畧をもつて左様な事を致したかと存じます、猶々吟味仕りますれば今日は此儘にて御立歸りを願ひとうムいます、

「御聞きなされた大和殿、可哀い娘の婿ぢやもの、何んの罪に

落したき事ありませりや、娘が持出す酒肴、娘の酌で婿殿ごさしむかひにて御酒宴、快い機嫌の千鳥足、婿ご娘に見送られ立關の方にお出ましの、御馬に乗せられて家來を連れ、お歸りなされる道すがら不思議なる事には御腹がしくしく痛んで参りました、家來は之を打眺め」

○「御隠居さまお顔の色が悪しふムいます、如何遊ばされましたるや、大イヤ格別心配致す事はない、少々腹痛であるから急いで立歸りますやう、

○「心得ましてムいますと、駒の口を取て急ぎゆく、駒の上では早や息も絶えなくなる心持、我慢を爲してお邸の御門前へ立歸りました、

○「御隠居様の御歸りと云ふ辭にあはたしく立關に出迎ひを致した忤藏人、立關敷盛へ立出で、」お父上様お歸り遊ばせ、何んとなぐ御顔の色の悪しひ處が見へま

敷盛へ立出で、」お父上様お歸り遊ばせ、何んとなぐ御顔の色の悪しひ處が見へま

するが、何か御腹痛でもムいませうやと、傍に近寄りました時に、早や顔の色は眞蒼になつて、見るも悼はしひ有様でムいまする、奥の御坐敷にお連れ申して、上坐に直し、蕨お父上、如何なる譯で斯様なる有様におなり遊ばしましたるやと云ひ限る時に大和殿、

「秋の廣野の蟋々、霜によはりし泣聲や、軒端を傳ふ笹蟹の糸より細き聲立て、」

大「今日百姓共の話しを聞き、其上ならず杉山彈正の不取締、意見をせんと婿殿の屋敷に参り様子を聞けば、川北五兵衛の私慾なりと聞て喜び、婿殿に罪がなければ結構と、お酒をよばれ歸る道、頻りに痛む下腹の能く／＼考へ見ますれば、アノ毒を婿殿に吞せられたのじやと思はれる、我身は此處で死するとも、御前は跡に永らへて、家に必ず疵のつかぬ様に致しきれい、と聞いて驚ひたる藏人、己れ悪くさ杉山彈正、姉婿とは云はせはせぬ是から杉山方へ乗り込みたつた一と打、氣相變て下

げ刀表を望んで駈出さんと爲しけるを、堀田大和は不圖引止め暫く待て是れ悴腹の立のは最もなれど今婿殿に毒酒を飲まされたと申するが殿の御耳に入りなば、杉山の家も滅亡すれば大和の家も是れ限り、婿の奸計にかゝつて死するも前世の約束事と諦められる、兎角世間に洩さるが是ぞ兩家の爲めなるぞと涙をこぼして止ました、蕨お父上のお止めによつて思ひ止まる事に仕りませう、と申しましたが残念でなりません、直ぐに醫師を招き手當を致しましたが、口より惡血を吐き、其儘ドサリと打倒れて彼の世の客と相成りました、

「御話しは替り悪人ごもは寄合て、堀田大和を生して置けば身の爲めならず、何うやら是で一安心と杉山彈正を始めとして悪人ごもは喜んだ其後相談の上東國屋五兵衛を召捕り茨原臺にて逆磔に行ひました、實に不愍は五兵衛殿、」

夫とは知らず百姓どもは、〇さまを見やがれ、東國屋悪ひ巧みをした爲めに報ひは忽ち此の通りだ、逆磔になつたので是れで胸がすゐたと皆喜んで居ります、あはれや東國屋五兵衛の家は缺所と云ふ事になりました、悪人どもが其物品金銭等を取上げ、氣の毒にも五兵衛の忤傳兵衛と云へる者、女房のおたかに忤傳次郎三名連れで、破れたる衣類一枚づつ着用致し、堀田領地を追放と相成りました、三名は城下外れまで役人に追出される一里參り急ぎ來て思はず、知らず後ろを眺め、

フシ「佐倉の城を睨めつけ、己れ悪き城代家老の杉山彈正何んにも知らぬ父上に私慾の罪を着せ、世に恐しき逆磔に行ひし其上ならず、永く續きし東國屋五兵衛の家を欠所に爲し、吾々どもまで此の姿にて國追放は何事なるぞ、人に怨みがあるものかなきものか今に無念を晴さて置くべきか、夫婦の者は涙を呑んで佐倉の

第 五

城下を跡になしつゝ、落てゆく、此の傳兵衛が末となり江戸表なるお役人お調べの際、證人として罷出で悪人ごもを退治ると云ふ是より如何相成りますか、

フシ「人は一代名は末代、未だに残る下總の義民の龜鑑宗五郎、御譽れの一代記、如何になるか辨じませう」

此處は岩橋村の名主宗五の宅で、表より名主共が七八人參りまして、

〇「ハイ御免なさい、宗五殿御宅か、女房のさんが夫へ出でまして、さいますしサアお上りを願ひます、坐敷に上つた名主ども

〇「宗五殿今日はマア結構な事じやアないか、郡奉行様の邸より吾々どもに御祝の

御酒を下されて、其上ならず小前百姓どもに幾何かのお金を下されると云ふ、コンナ有難ひ事はありません、前年まではアノ悪ひ東國屋五兵衛め入らざる事を爲やアがつて二割増杯と云ふ樹をこしらへて、夫が爲めに此の佐倉城附二百廿九ヶ村の大騒動となりましたが、今年の春から御役人様方も百姓共を可愛がつて下さるし、こんな嬉しい事は無いと云へません、是で世に出たやうな心持がしまするぞや、サアお前さんを誘ひに来て進せました、一緒に往きませう

宗「ハイ御親切に御誘ひ下さいまして有難ふムりまするが、私は今日身体が少々悪ふムいまして、御酒の場所なぞへ出る事は出来ません、何うぞ貴下方お越しを願ひとうムります、〇イヤ左うでムいますかノ一折角御誘ひして進せたけれども、御病氣じゃア仕方がない、然し折角の御呼出鳥渡往つてお顔出しなりともしたら何うでムいます、宗「イエ往けるものなら参りませうが、今日は一寸も動く事が出来ませんから、御親切を無に致すやうでムいしますが、宜しく御断り申します

〇イヤ左やうならば仕方がない、私共お先へ参ります、と云ひすて置いて、名主どもが

「表へさして出でましたが、互ひに顔を見合せて、ほんに愛想のない宗五郎、態々誘つてやつたのを、今の彼奴の一言は、是から後は何事も相談するには及ばない、早く往ふと勇みたち、郡奉行のお屋敷へ足を早めて急がれました」

跡に残つた宗五郎が、莞爾笑ひ組頭なる義兵衛をば直に我家に呼び寄せました、宗「義兵衛殿や、今日お前を呼びにやつたのは外じやアないが、郡奉行のお屋敷へ私の名代として往つて下さいまし、

義「承知致しました、なれど御庄屋様何故に貴下はお出になりません、宗「イヤ私は病氣だから往く事が出来ません、お前が私の名代に往つて、御酒をた

らふく飲んで、酔ばらつて下さいまし

義「酒と聞ては狸々の義兵衛でムいます、命にかへて飲んで参ります、

宗「ハ、アイヤ實にお前は徳な男だ、先方へ往つて役人が、斯う云ふ事を訊ねたら、斯う云ふやうに云つて下されいと萬事の事を云ひ含め、組頭の義兵衛をもつて郡奉行の屋敷へさしむけました、

フシ「此方は義兵衛緒太草履に身をのせて、木綿の着類に木綿の羽織紐は觀世捨をもつて結び、にこく来る郡奉行牧尾越後の邸なり」

義「皆さん御苦勞さまでムいます、〇イヤお前は義兵衛殿じやないかエ、名主殿は何うしなされた、〇ハイ何うも今日は宗五郎旦那が御病氣で往く事が出来まいと云ふので私が名代に参りましたのじや、〇オー左うか、お前の名代ならば随分役が勤まるぢやらふ、マア此方に上りなされ、義「お歴々衆御免下さいまし、お名主と同じ

處に坐を占めまして、煙草を吸ふて居ります、暫くして役人ども何時に變りにこゝやかに、百姓どもに向ひ

役「時に名主の衆能くこそ集まつて下された此度江戸表御上屋敷、御殿様の御祝ひにつき名主一統に御酒を下し置れ、小前百姓どもに一貫文の鳥目を下し置れる、遠慮なく御酒を飲んで歸つてもらひたい、名主衆は喜んで聲を揃へ、

〇イヤ有難ふムります、冥伽に餘りました其のお言葉、吾々ども有難く頂戴を致します、左う斯うする内に酒と肴が出でました、皆喜んで飲みはじめ、無賃の御酒でありますから遠慮なく頂戴をする、内に皆ズブ六に酔がまわり、役人衆の前をも憚からず、高聲で浮世話しを始める、

フシ「其折傍への襖をさつこ開かれて、上下を着け悠々ご現はれたのは當家の主人、牧尾越後ご見へました」
杉「此度上より下し置れる御酒、小前百姓に一貫文鳥目を下し置れる、有難く受

納致せ ○有難ふ存じます、皆々喜んで頂戴致して居りまする事でムいませう。
 又是にある切手は來年一月より下總一般通用の御國切手である是を一枚づゝ小
 前百姓どもへ、其方どもより渡してやれ、十ヶ年の間通用致す ○有難ふムいませう
 此の事を小前の百姓に申しますれば、嘸ぞ喜ぶ事でムいませう、お有難ふ存じます
 牧 夫れにつけて江戸表の大殿へ、正に受取つたと云へる御書付をさし出さねば相
 成らん、小前百姓總名代として皆々此處で名主が代筆をもつて、受取を認め村印を
 押捺て宜らふ ○私どもは皆文字の方は不得手でムいませう、況して今日は酔つづ
 れて居りまするから、中々お上へさし上げる御書付杯は書事は出来ません、宜敷お
 上の方にお願ひを致します 牧 夫れは最ものも事である、此方の方で萬事書て得させ
 る、申しつけたる村印持參致し居れば、是へ差出すが宜らふ ○へエ心得ましてム
 います、皆つ、がなく持參致して居ります、何卒宜ひ處へお押しを願ひます、
 心の丸い名主の衆、村印をさし出すを牧尾越後は受取り、一々其の書附に押捺まし

た
 牧 コレ 岩橋村宗五は如何致した、傍より聲ひそやかに 義 エー宗五殿名代は此處
 に居ります、今日は病氣に就きまして私 が參りました、組頭の狸々の義兵衛と申
 し上げます 牧 ムー夫れでは名代とあるか、名代でも宜い、村印を之へ押しませ
 エ 義 エー何んでムります、宗五旦那が被仰いますには、村印と云ふものは一ツ
 押し損なつたならば村一統の迷惑になる事だから、必ずお前たちの様な狸々と字名
 の附た酒好の者には渡す事が出来ないと被仰いました、夫れ故に私 は持て參りま
 せん 牧 夫れは大ひに不都合ではないか、其方宗五の實印なりと所持致し居るか
 義 左様なものは一向持參致しません 牧 其方宗五の名代として是へ參つた以上
 は彼の印形はなくとも其方の實印は持參致して居るじやらふ、此の書附に下げ札を
 致してあるから、其下札の處に私立歸りますれば屹度宗五に村印を押させます
 ると云ふ事を書て、其方の實印を押すが宜しからふ 義 夫れは誠に困ります、私

の印形を持って来いと云ふ御觸がムいませぬから、何んにも持ては参りませぬ 牧「夫れは困るな夫れでは汝が爪印を押します様 義「恐れながら爪印を忘れて参りました傍に聞て居りましたる名主共が、

○「ヤイ、義兵衛、何を云やアがるのじや能く物を考へて見ろ、爪印を忘れる奴が世の中にあるかエ 義「ゴテ、被仰いまするな名主の衆、爪印を忘れたから忘れたと云ふのでムいしまする ○「貴様が爪印をせんと困るのじや 義「ハ、ア私が爪印を忘れたのが村一統の爲になるのでムいしまする、傍から彼是云はつしやるな、

フ「牧尾越後は義兵衛の口振を聞きまして、此方の巧みを覺りし奴に見受けたり、餘り深く訊ねれば如何なる破滅になるやも知れぬ岩橋村は見免し置くが宜らふ、と思ひましたで聲ひそやか」

牧「ア、宜い、其方が只今の申立お上は誠に御立腹であらふ、と心得る山橋村一ヶ

村は落印であるから左様心得ろ、結構でムいします、落印結構でムいします、有難ふムいします 牧「其の替りに岩橋村一ヶ村だけお上より下し置れる一貫文の鳥目は遣はず事は出来ないぞ 義「ハイ、結構でムいす、一貫文の鳥目を下さいませんでも大事ムいませぬ、無理に頂かふとは申しませぬ、傍の方を向ひて知らぬ顔で煙草を吸ふて苦笑ひを致して居りまする、牧尾越後聲張揚げ、

牧「名主一統の者只今此の書を読み聞せるから能く耳に残しまするやう、立歸つて小前百姓に申し聞ける、之を聞て名主どもは遙か下坐に飛び退り、行儀正しく膝に手を置いて様子を聞て居ります、

牧「一ツ此度お上御芽出度につき、百姓ども一統へ下し置れ候品々有難く受納仕候就てはお上お物入り續きと存じ、今年より向ふ五ヶ年の間、年貢二割増にて上納仕候若し小前の者兎や角申候時は名主を以て無滞御納め申候爲後日一書 如件お上様へ、二百廿九ヶ村岩橋村落印、年月日、之を聞たる名主は驚ひた

○「夫は何かの間違でムります、吾々どもは左様なる事を承知致しては村印を押したのでは無いません、御酒と御鳥目を頂きます御禮の爲め村印を押しましたのでムいます、何か物の間違ひだと心得ますから、宜敷御取調への程を願ひとうムいます、飲んだる酒も醒はて、一同ぶる／＼顔へて居ります、此時に牧尾越後を始めとして他数名の役人、刀の柄に手をかけ、

役 己れ悪き奴等、一度承諾を致し村印まで押しながら、今になつて物の間違ひとは何んだ、五ヶ年の間、此の書の通り、二割増にて上納致せば、宜し、左もなき時は名主一統の命は此の場に於て果しくれるぞと云はれて名主は表をさして逃げ出す、

フシ「義兵衛はにこ／＼打笑ひ、傍にあつたる御肴や御馳走を竹の皮に包んだ儘懷中さして捻ぢこんで、庭にヒラリと飛下りながら名主の衆が穿て来た立派な穿物に身をのせて跡は野となれ山

となれ俺が村だけ、花盛りとにこ／＼笑つて立歸る、」

名主どもは皆東勝寺へ集つて参りましたが

○「何うしたものでムいませう、斯様な事が小前の者に聞へたら如何なる騒動を起すかも知れません、と皆青くなつて心配を致して居ります、サア何處から聞き傳へたか、小前百姓が是へ集つて参りました、○「ヤイ名主共己れ達が智慧が無いから斯ういふ事が出来るのだ、御酒杯を御馳走になつて、嬉しがつた爲めに村印を押すとは何んだ、村印を粗略にするからこんな事が出来る、此の始末を能くつけければ宜し若し附けない時は名主共を叩き殺してくれから左う思へ、大變な騒ぎになります、大勢の百姓で東勝寺の境内は黒山のやう、蟻のはへづる穴もムいません位か、此の時に名主の面々は、

名暫し待て下さいませし小前の方々、今に宜きやうに致しますから、

○「何にを吐しやアがるんだエ、そんな事を眞實に受けて居ては、喰ふ事が出来ね

エフ、岩橋村を見る名主様が賢ひ御方だから、村印を押さねエ爲に村一同安泰のも
のだ、此處へ岩橋村の宗五旦那が出て来て、扱つてくれるまでは俺達は歸エらねエ
から左う思へ、一同耳にも名主の説諭を聞き入れません、早く宗五旦那を連れて來
いとわめき渡る、

フシ「仕方がないで、名主の中で、小原村の半十郎、勝田村なる名主
で庄右衛門、小前の百姓に脅されたので、宗五旦那を呼んで來て
此の騒動を治めてもらはにやなるまい、ご急ぎ來たのが、公津新
田岩橋村宗五の住居で御坐います、宗五殿に對面致し右の話しを
致しますれば、木内宗吾は成程貴下方の御召喚御顔出しは致度
ふんいますが、病氣の爲に往く事出來ぬ、私の名代義兵衛をお連
れなさるが宜らふ、ごポンご辞られて仕方なく」

〇「夫れでは義兵衛殿なりと借用を致しませう、〇「只今義兵衛を呼びに遣りますか
らお連れ爲すつて下さいまし、祟有難ふんいます、宗五は直ぐに義兵衛を呼びに遣
る出て參つた義兵衛、委細の事を承はつて、義イヤお庄屋様御心配はムいませぬ、
宗五殿の名代に往つて私が治めて參りませう、大丈夫でムいます、と二人の者に連
れられて岩橋村を立出づる

フシ「足を早めて東勝寺の境内に參りました、早くも見てこる小前
の百姓宗五旦那が顔出しをせずば、吾々一同は引取らぬ、義兵衛
のやうな泥酔漢が出て來ては、何んご云つても吾々は引取らぬ
若し宗五旦那のお顔の見へない其時は、名主中を叩き殺すご騒ぎ
立てわめき渡る其聲は百雷落たる有様、大勢の中を押し分けて、
暫く待て下さいと飛んで出ました一人のお方、コハ何者で御座

第 六

いませう、何れ次回に……」

東勝寺に集りましたる小前の者共、大體理由の判らねエのは宗五郎様だ、成程我村は落印で夫で事が治つたらふ、然し此の佐倉城附二百廿九ヶ村は親兄弟の様に交際して居る他の村は何うでも宜ひ、我が村さへ宜ければ構はねエとは憚りな宗五殿、構はねエから、是から岩橋村へ出懸けてゆき、一層の事に宗五旦那の家を叩き毆してしまはふじやアないか、

○夫れが宜らふ云ふ折しも一人の男が夫へ飛出し、男左うたく今も云ふ通り餘りと云へば宗五旦那が不人情だ、聞けば病氣だと云ふが、先程俺が宗五旦那の裏手を通つた時、庭先へ出て益裁を頻りにせつて居らした、病氣の人が庭先に出てそんな事が出来るものじやない、構はねエから押寄せろ、

○宜らふと殺氣立つたる人々が駆出さんと爲したるを、飛んで出でたる千葉村の忠藏、忠「マア小前の衆待て下さいまし、成程お前達の立腹するのは最もじや、然し相手が宗五郎殿であつて見れば、左う不作法な事は出来まい、兎も角も私が往つて話しをして見やうと云ふて小前の者を止めまして、忠「若しや今度私が往つて宗五殿が顔出しが出来まいといふ事になつたら、此の千葉村の忠藏は皆さんへ無事の顔は見せません、夫れを一ツの功として待て居て下さいまし、と大勢の人を待して置て千葉村の忠藏其年取つて五十八才

フ「急ぎ来るは岩橋村、他の村は上を下への混雑なれど、公津新田近傍は實に静肅で小前の者、爐の四邊を取巻いて浮世話を致ながらの高笑ひ、之を聞たる忠藏が、小前の者の腹の立のも無理はない成程同じ名主で有けれど、吾々ごもは馬鹿だナ、ご吾が身で吾

身に恥入つて、頭も上げず宗五の家へ遣つて来た、
忠「御免なさいませ、千葉村の忠藏でムいます、宗五の妻おさんは夫へ出でま
して、

さん「是は忠藏伯父さんでムいましたか、サア何を此方におどほり下さいまし、主
も家に居りますから、忠「倍今日は宗五殿に會て話の爲たい事がムいまして、態々と
参りました免して下さいと奥に通つて参りました、

宗「是は、御出で下さいませ、千葉村の兄いさんでムいますか、貴下方が今日郡
奉行のお邸へお出なさるに就きまして、私も御顔出しを致さなければならぬ筈でム
います病氣には勝つ事出来ず、遂御不禮を致しました、マアお茶なりと飲ませ、
是れおさん坐蒲團を差上る、

さん「ハイ、と答へて取出す坐蒲團、夫を敷すに忠藏が、忠「時に宗五殿今日はお前
に折入て頼みがムいます、實は斯うく斯ういふ様な譯で、お前が顔出しをして

れねば何うしても治りかつがない、是非東勝寺へ来て貰ひたいものじやが如何でム
いませうや、之を聞きましたる宗五郎、

宗「成程兄いさんのお頼み毎時なら顔出しを致しませうが、今日ばかりは何うしても
顔を出す事が出来ません、と云ふのは御承知の通り病氣でムいまして、一步も歩む
事が出来ないでムいます、忠「左うか、病氣では仕方がない、然し歩む事が出来な
ければ、駕を雇て参りますから夫に載てなりと来て頂きたい、

宗「成程駕なら宜しふムいませうが、其駕に乗る事も出来ませんのでムいます、
忠「夫れは不思議だナ、そんなら此の千葉村の忠藏が、お前を脊負て往きませう、
宗「イヤ私を脊負て往つて下さいませうのは有難ふムいませうが、お年老られた背下様
のお手をいただいては何うも往く事が出来ませんか、今日は宜しくお断りを致し

ます、忠「夫では宗五どん、何うしても往く事は出来ぬと云はつしやるか、夫れなら
話しませうが、今日お前が顔出しをしてくれない時には、小前の衆が立腹して、二

百廿八ヶ村の者が集つて、お前の村に押寄せ此の家を叩き潰して、お前の命まで取ると云ふて騒ひで居りますぞヨ、
 フシ之を聞たる宗五郎、他の者なら恐れもしやうが、熊本で我が身は生れ、村に騒動があつたる時、命を賭て働ひて小前の者を助けた後に、生れ故郷の熊本に居る事出来ず、追放されて流れく下總の印幡の郡佐倉領、公津新田なる木内の家に養子に入り、木内宗五となりました、百姓としては器量の過ぎた宗五郎、莞爾と打笑ひ、兄イさんヨ私が顔を出さないにて、此の岩橋村に押寄せて村を潰すとは面白い、一番潰して頂かふ、と心動かす氣色なし』

忠「夫れではお前何うあつても来る事が出来ぬと云ふなら仕方がない、モ一是まで

ムいます、御免と云ふより忠藏は隠し持たる八寸三分の短刀、拔手も見せず我が咽喉へ突たてんと爲しけるを、あはて、止めし宗五郎、宗是はマア何うなされたのでムいます、宗五の家で死なれては困ります、お氣でも間違つたのではございませんか、忠「イヤ、必ず氣は間違は致しません、又發狂も致しません、小前の者に云ふたには、宗五を連れて來ない時には二度と貴下方には顔合せません、と云ふて別れた此の忠藏、今更お前が顔出しを爲ぬと云ふて、オメ、私が歸られますか、なまじ生て他人様に笑はるゝより死んでしまつたがましであらふ、何うかお前は私の首を切て、實は斯う云ふ譯で忠藏が死んだと小前の衆に云ふて下さいまし、今まで兄弟の交際をしたお前じやから、此の事をお頼み申しますと、云ふより早く尙も突んとするを無理に押し止めて宗五郎、マアお待ちなさいまし、夫れでは兄イさん私か顔を出さない時には、貴下は命をおすて爲さいますか、如何したら宜らふやら、此の下總に流れて來て、今までは千葉村の兄さんか宗五かと兄弟の盃をして美しく

交際して居た二人の仲、其忠藏が死ぬと云ふのを其儘捨ては置れない、と云ふて此の騒動に顔出し爲たら、俺の命は逆もあるまい、モ一斯うなれば仕方がない、二百廿九ヶ村の爲に事によつたら命をばすてにやならぬと覺悟を定め、

宗、宜ふムいます、貴下が夫れ丈ヶの事を被仰まするならば、屹度宗五は顔出しを致します、忠、エーそんならお前は顔を出してくれませんか、ア一有難ひ、夫では一緒に往て下さいませ、宗、承知致しました、おさんや早ふ旅さしを持って来てくれ、おさんは不性無性に立上り、持て来ました旅差、さん、旦那さま貴下は御顔出しは厭じやと被仰ましたのに、又お顔出しを爲さるのでムいますか、却てお身の爲に悪ふムいませう、と虫が知らしたかホロリとこぼす涙、宗、イヤ〜お前は左う云ふ事を云ひますが、斯うなつた上からは顔を出さぬ譯には参りません、サア兄さん御案内を願ひます、と宗五はヌツクと立上り、

フシ二人連れにて急ぎ来るは東勝寺、變る話は此方にて名主一同

小前の者が宗五が来るかご待兼る、イヤ来たゾ〜向ふに見へるのはアレは千葉村の忠藏様、其後から宗五旦那も遣つて来た、イヤ有難ひと皆々は喜んで居ります、處に来る宗五郎皆さんモ一少し早く宗五が顔を出さねばならぬ筈で御坐いますが病氣の爲にお顔出しも出来ませなんだ、宗五郎が参りました上からは、悪いやうには致しません、小前の衆が此處に斯う集つて居られては話しが出来悪ひ、今日は皆々御引取りを願ひます、必ず皆さんのお顔の立やうに致しますれば、ご云へば小前の者ごもは成程宗五旦那の其お言葉、夫で得心致しました、宜しくお願ひを致しまするご皆々は立歸る』

東勝寺の本堂廣やかなる處に二百廿九ヶ村の名主共一同集り、種々と評議を致し

ましたが此の上は是非なき事でもいますから、お上に一應の願ひをして年貢二割上納の事をお断り致さねばなるまい、夫が宜しからふと云ふので、相談の結果第一木内宗五、二番に千葉村の忠藏、三番小原村の半十郎、四番勝田村重右衛門、五番には高野村の伊兵衛、六番瀧川村の六郎兵衛、七番瀧の村の三郎兵衛、右七名の者が總代と云ふ事になり、第一願つて出ましたのが郡奉行、牧尾越後の許、越後殿決してお取り上げなく、其願書は引退げられる、仕方がないで町奉行田中惣左衛門の邸に願つて出る、之も同じくお取上げがない、無據杉山彈正の元へ願ひを出しましたなれども是は悪人の筆頭でムいますから、取上る道理もない、

フシ「七名の者相談を遂げて、小前の者ご再び評議をし、茲に江戸表へご乗り込んで、黒船町の御上屋敷に御門訴を致すより外に手段はあるまいと、一村より三名宛出し、二百廿九ヶ村の者皆簞笠の用意を致し江戸の土地へご志し、黒船町の御上屋敷堀田公

へ御願ひをする、御門訴になる御話一は一と息入れて又言上を致します』

第七

フシ「申残しになりました、佐倉の曙義民傳不内宗五の御話しぞ、偕て此時に二百廿九ヶの人々簞笠を着用し江戸表に乗り込んで黒船町の上屋敷、堀田侯の御住居へ御門訴致したが、悪人ごもに支へられ、其願ひも齋餅ごなり、皆々國に立歸る跡に残りし名主七人練堀の小路の小間物屋佐助の家に身を隠し』

夫れより願書をもつて、御奉行に願ひ出たが御取上げがムいません、寺社奉行に申上げたが同じく御取上げなく、若年寄御老中迄願ひ出でましたが何れも御取上げ

がムいません、或日六人の者を上坐に直した宗五郎、
 宗御一同の衆御聞き下され、此の通り願ひ出しました處で、御取上げもなく是非
 もない次第、此の上は時の大老酒井雅樂頭様に御願ひ致するより他に手段はムいま
 すまい、と私は決心を致しました、其時に六人の者が、
 ○成程夫が宜しふムいませう、然し私が大老へ御願ひをすれば、天下の罪人御作
 法破りの罪は免がれません、命のないは素よりでムいますれば、若し宗五酒井雅樂
 頭様の御家來に御手討になつたと云ふを聞かれたならば、貴下方六人入れ替り立ち
 替つて其御係りへ御願ひを致され度存じます、その願の書下書は茲に一通殘し置き
 ますれば、此の通り御書き遊ばされ、七名の者残らず命をすて、お願ひを致さねば
 なりますまい、左う斯うする内に最早時刻も移りますれば、御暇を致しますと六名
 の者に別れを告げて宗五郎は、練塀小路の小間物屋の内を忍び出で酒井雅樂頭様の
 御下城を今や遅しと相待居ります。

フシ「遙か向ふの方よりも急ぎ來りし一挺の乗物其周圍を御家來
 の衆押取り圍んで嚴重に御通り遊ばされたり、雅樂頭様は上州
 前橋の城主十五萬石、時の大老を勤め忠清と仰せられる、其行列
 を見るより喜び勇んだ宗五郎御駕の傍へ近寄つた、
 願書を懷中より取出し、御願ひの者でムいます、御訴へ致します下總印幡の郡佐
 倉の領分、二百廿九ヶ村の惣代をもつて御願ひ申上げます、と傍へ近寄て参りま
 したる時に酒井雅樂様の御家來、
 案「下れ、白痴者め作法を存じ居らぬか、時の大老にさし越し願ひは相成らぬ、
 御訴は天下の御法度なるぞ、汝順當をもつて願ひ出で、案「恐れながら作法破りと
 云ふのは承知致して願ひ出ましたる、次第何卒、御聞濟み願ひ度存じますると宗
 五郎は血眼になつて御駕の傍へ寄る、案「悪き奴めと、家來の者共刀の柄に手をかけ
 て今や斯うヨと見へたる時、

フシ「駕の内より聲ひそやか、家來共暫時待てご御聲かゝる、雀の千羽より鶴の一聲家來は、ハツと飛び下る雅樂様其願書是に持て、」

御家來が御取次を致しました酒願ひ出でたる者を我屋敷に引立ろ、と云ひすて御駕は其儘参ります、宗五郎は後手に縛り上げられ、

家「キリ／＼立て、と家來數名に取まかれ、引れて参りましたのが大老酒井侯の屋敷でムいます、犬潜りより通され、お庭先の此方に参りまして、片手は免されて敷石の此方に引据えられる、酒井の家來が周圍を取巻て居りますから、動く事も出来ません、暫く經つて

フシ「向ふの方の唐紙左右にサツと押開き、悠々ご夫れに現はれ出たるは、黒羽二重の御小袖五ツ紋に仕り、下馬將軍と云れたる時

の大老酒井雅樂、御椽まで御進みに相成り、宗五の姿を疾と眺めて」

酒「怨訴致せし者汝何處の者なるぞ、と御訊に、宗「申上げます私は印幡の郡佐倉の領民、公津新田岩橋村木内宗五と云へる名主にムいます、二百廿九ヶ村名代として江戸に出府仕り御大老様に御願ひを致しまする次第にムいます、

酒「左様か何等の願ひであるや、宗「私の領主御取立殿敷、二百廿九ヶ村の者ども其日の露命を繋ぐ事も出来ませぬ若し此儘に日を送りますれば、餓死致す場合にも立至り申すべく、夫故に私一命をすてお上に願ひ出でましたる次第にムいます、宜敷御取上げの程を願ひ奉る、酒「左様か、其儀ならば取上げる事は罷りならん、下總佐倉領地の事に就て口出し致すべき雅樂は役柄でない、家來ども其願書を下げ得させい、聞て驚く宗五郎、お取上げになるかと思ひの外御覽遊ばされず其儘お返しと聞き、思はず知らず、沓脱石の傍にひれ伏し、頭も上げず只涙にくれて居りました

辭願はして、宗五郎 宗御大老様何卒御取上げ儀を願ひ度存じます、
 酒 馱り居れ汝の領主堀田上野取立嚴敷事ならば、夫には郡奉行町奉行、目附役城
 代家老と云へる者あり、是に何んぞ願ひ出さるや 宗仰せまでもムいませぬ、郡
 奉行町奉行目附役城代家老にも再度願ひ出ましたか、其方々は皆々悪人に一味致さ
 れ、少しも御取上はムいませぬ、第一御年貢御取立の嚴敷事、壘一枚に就て幾何、
 喜び事愛ひ事、傘一本に就て幾何、丹後鋤鉞秤樹に至るまで、運上を御取上に相成
 り、此儘にては佐倉の領民、朝夕の煙を立つる事も相成りませぬ、夫が爲に江戸表
 へ参りました、黒船町の御上屋敷堀田の大殿に御願ひを出しましたる處同じく御取
 上がムいませぬ、却て吾々を御悪しみあり、江戸の土地には頭を上げて歩行する事
 も相成りませぬ場合にムいませぬ是非なく御大老様にさし越し願ひを出しました、宜
 敷御調べ下さりますれば有難き仕合に存じます、眞實面に現はして云へる言葉を、
 酒井侯

「熟々宗五の其顔を見るにつけても、普通の百姓にはあらで實
 に立派な人物、眞實面に現はしての訴、義を見て爲ざるは何んと
 やら此の願書取上げてやるが、眞の大名なりと心得、苦しふない
 願書最う一度是へ、と御聲かゝる家來は行儀正しく手渡し致す
 手に受取て雅樂頭御覽なされた事なれば、實に慙れな次第なり」
 不惑なり、取上げ得さする、早々其者を下て宜らふ、叮嚀に扱て我屋敷へさし置
 いて宜らふ、どの一言雅樂頭の家來は宗五を叮嚀に取扱、一室に案内を致してくれま
 した、雅樂頭殿其夜は佐倉領の百姓困難の事を慙れに思はれ、枕に就きても少しも
 眠らず、翌日早朝御屋敷を御立出遊ばされ、千代田御殿に御登城に相成りました、
 茶坊主をお招ぎに相成て 酒堀田上野を是へ招け 坊心得ましてムいます、
 「上野介は何事ならんご心得て、酒井侯へご目通り恐るく

参られる』

酒苦しくない近ふ、上有り難き仕合せ何等の御用にごさいまするや、酒他のことでもない、此度様子を承はつたる處、御民の御領地下總印幡の郡の農民共、本年取立の嚴敷に今日明日の命も支へ難く餓死を爲す者數知れず、不惑の事と承はり御身に對し御諭しを仕る此の上は國元に潔白なる武士を差向け、其壓政の事柄を改むるが宜らふ、と存する、親切に仰せ遊ばされるを、堀田上野却て立腹致し、眼をつりあげて、成程其仰せ有難ふムりまするが、恐れながら私領地の事に就きては及ばずながら上野一存をもつて、仕置仕ります、貴下様御口出し遊ばさるゝ場合ではムいませぬ御大老とあらば、將軍家の御政事に御口出し遊ばされる様、入らざる事に御口添は御無用に遊ばされるやうと其儘立て向ふに行く、

フシ』是を聞たる酒井侯、己れ悪き堀田上野、國を安泰に治めて遣りたければ、こそ親切をもつて彼程に説聞せたるを忝けなし

ごも思はず、今の悪口は何事なるぞ、最う斯うなれば是非に及ばぬ、公儀の法に行ひて、堀田上野の家を潰して呉ればやご立腹爲されたばツかりに、如何なる騒動が出来ますか、鳥渡一ご息入れまして次なる段にて辨じます』

第 八

雅樂頭殿實に御立腹遊ばされまして、己れ堀田の家を潰して遣らふと思ひましたが高が農民の騒動にて家を取潰すも不惑なり、上野介と云ふ奴は愚か者なれど、彼が父加賀守紀ノ正盛と云へる者は、三代公御他界の際に我身も腹切て君の御供致したる誠忠の武士、其家を今となつて断絶さするも不惑の至り、何事も穩に治るに越した事はないと思召され怒りを堪へて御退りになりました、早速宗五を招き此の語

しを致ますれば、宗五は涙にくれ、宗「其様な殿様にムりまする故、小前百姓どもは申す迄もなく、一國の者皆々困りはつる義にムりまする、と云ふたる儘跡の言葉はムりません、酒井雅樂頭殿も宗五を不惑と思召、其夜は種々と考へて居られました思ひあつた事があるか、家來の者に云ひ付けて、上野東叡山へ使を立る、
 フシ「茲に上野東叡山寛永寺三十六坊の惣取締凌雲院大僧正云へる御方に何卒御越しを願ひたし、使者を立てたり、夫故何事なるか、大僧正酒井の館へ急がれた」

酒大僧正殿に御願ひがムります、此度下總佐倉領、取立嚴敷さに小前百姓は申すまでもなく、一國の者路頭に迷ひ、今日明日の命となり、餓死を爲すもの數知れず實に不惑と存じ、昨日堀田上野へ千代田城に於て意見を致し候へども、一向取上げ氣色もなく、其儘すて置けば國の亂の素で、御身上野介の爲には茶の師匠師

匠と云へば親同前、何卒上野介に御意見を願ひ度存する、

僧「委細承知仕ります、屹度上野に意見を致し遣はしませう、酒「就ては某に怨訴致したる佐倉の領民宗五と云へる者、我屋敷へ置く事叶ひません、何卒上野東叡山に御隠匿の儀を願ひたい、僧「委細承知仕る、必ず宗五と云へる者は當方に於て手當致し遣はします、ソコデ大僧正が宗五を連れて表の方に出んとすれば、早や上野介の家來の者が二三十名姿を變へて、裏と表を取巻き、若しや宗五が出て來まいか來れば召捕くれんと待受ける、

フシ「此の様子をば打眺め此儘連れては往かれぬと大僧正の御駕に共に宗五を乗せました、堀田の家來は夫れとは知らず、見免しました、
 ましたで喜んで大僧正一ツの駕で、宗五は上野に着きました、

大僧正は御歸りになると、御院代延壽院と云へる者に申付け、此の御院代の許に宗五をお預けに相成りました、其後堀田上野介の元へ茶の湯の會を致する故、早々参るやうと云ふ使を立てる、上野介喜んで東叡山に参りました、

上「今日はお招きに預り参上 仕りました 賃、イヤ能くこそお越し下された、先づと云ふので第一に、お茶を出し待遇しました 賃、少し御身にお訊ね申度事がある 承はれば下總印幡郡城付二百廿九ヶ村の者ども、餓死を致する者數知れず、佐倉の城下近傍は日に増し難儀致すものが増殖ばかり、遂には城下も淋しく相成つたと云ふ事を承はつた、貴下の爲には某は茶道の師である、夫故貴方の事を思つてお話しを致す、何卒宜敷此の上ながら御政治御改めを願ひたい、左もなき時は一國亂れる基と心得ますれば、宜しく御改革の儀を御願ひ申上げます、最と町寧に大僧正が仰せになると上野介と云ふ方は何う云ふものか左程愚とも思へませんが、烈火の如く憤り 上「お黙りめされ大僧正 貴下は御出家では無いませんか、政事の事などに御

口出し下さる、は、甚だ迷惑、身不肖ながら一存をもつて、國の政事を仕る、入らざる事を仰せ下さるな、立腹の体にて其儘屋敷へ立歸る、

フ「跡に残りし大僧正、十五萬石の主人として、人に御領主殿様ご仰がる、身の上野、アノ一言は何事なり、定めし百姓ごもが困難致す事であらふ、と思はず落涙を遊ばされ、是を此の儘すて置ては下總佐倉の農民が不惑なりと思召、其時上野東叡山の宮様一品親王の御位ある、當時根岸の邊りにあらせられる、尊きお方に佐倉領民難儀の始末を申上げました」

お聞きになりましたして宮様が、不惑なる事である、よきに取計ひ得さる故、安心致して立歸れ、そのお言葉、大僧正喜んでお歸りになりました、早速上野介に茶の會を催ふすとの事に就て、お呼び寄に相成りお茶を上野へ下し置れ、改めて宮様は

上野に向はれ、宮時に堀田上野、其方の國表の事に口出し致すは否な事であるが、結局は其方の爲めと思ふて申傳へる、國表取立の嚴敷さ實に農民ども今日あつて明日支へ難き困難に陥りし由、殊に餓死致す者數知れずと云ふ、聞くも不惑の至りである、此の上は政事を改革致し、領民どもに安堵させたが宜らふ、此の事篤と耳に残して立歸れ、と仰せになりましたる時に上野介心の裡はもゆるが如く、己れやれと思へども神の御末の一品親王宮家に向ふて、不禮な言葉を發する事はなりません無念を堪へて上野が、上御親切に仰せ下さいまして有難く存じます、立歸りましたらよきなに政事改革を致しまする、今日は是にてお暇を願ひますとお屋敷にお歸りになりました、其夜寢所にお入りになつても中々眠れません、

「堀田上野は身顛致して、己れ悪き宗五の奴、國の事をば江戸表に申立たるはッかりに何んにも知らぬ宮様まで、入らざる意見を見を申聞けられ、實に残念口惜しひ、イザ此の上は宗五の奴の命

を取つて、此の無念を晴してやらんこ立腹致されましたが、愚か
と云ふも餘りあり』

此方は延壽院の許に身を穩したる宗五郎、大僧正より宮家に申上げ宮家より御意見を下されたる上は、我が願ひ首尾能上野介御取上げになるかと日々夫れのみを案じくらし居りました、今日しも延壽院宗五にお向ひ遊ばされ、

延時に宗五御氣の毒な事で、大僧正始めと致し、一品親王の御位ある宮様まで御口出しなされたれど上野介殿少しも之を用ひず、却て立腹致せし由御身の願ひ叶ふべき道理はない、御諦め遊ばすやうと云ひすて、其儘奥にお入り遊ばした、跡に残りし宗五郎

「ヤレ情けなや、く國を出て遙々江戸の土地へ志して願ひし事は數知れず、恐れ多くも宮様までが御力添へを爲されて下

されしに御用へなき由此の上からは生て甲斐なき我身の上、何の顔下けて國表へと歸られう、一層の事はより黒船町の上屋敷、殿様の御門前にて腹割さばき相果んこ、宗五郎覺悟を極め、傍の机に向ひ書殘されし書面、第一は宮家に奉つる御禮狀、第二には大僧正への御禮狀、又一本は延壽院へ書殘したる手紙、今一通は酒井雅樂頭様への御禮狀、都合四通認めて居りまする後ろに立て御覽になりました延壽院の咳ばらひ」

延宗五殿何を認められる、ハツと驚き其手紙を机の下にかくさんと爲しけるを、御かくし爲さるには及ぶまじ、御身の黒船町の御屋敷の御門前に於て腹割さばくの御所存でござらふ、然し夫れは些と御考へが違ひはせぬかと存する、宮様が御口出し遊ばされてさへ御取上なき上野介、貴下が一人御門前に切腹致したとて何んの心

が付きませうや、左やうなむだな御命を御すてなさるな、一層の事……聲をひそめて傍へ寄り、延東叡山には三代將軍の御靈屋あり、毎年御命日に當四代の將軍様御佛參遊す、其の佛參の當日も近きにあり、一層の事に上様に直訴爲されては如何にござる、及ばすながら延壽院命にかへて御身の手引仕るぞやと云はれた時に宗五郎我を忘れてハツと下坐に飛び下り、

フシ「恐れ多くも武藏の國豊島郡千代田鶴舞の大將、四代の君に直訴の手引を爲し下されるとは冥伽にあまる御一言、宜敷御願ひ奉つる、イザ此の上は命をすて、直訴をするより外に策なし、斯く決心を致したる宗五、下題中でのお聞きごころ、國へ歸つて子別れになるの御話は順を追ふてぞ、申上げます」

フシ「申し残になりました佐倉義民の御話を、時間来るまで勤めませう」

是時に延壽院宗五に萬事を云ひ含め遊ばされました、宗五も悦んで

宗夫では残る六人の名主の者にも一應相談いたしたくムいますれば、名主のものを御呼寄を願ひ度ムいます、コ、テ延壽院殿の御慈悲を以まして、茲に六人の者を上野東叡山の黒門の前にありました、茶見世へ招よせる、奥の坐敷に六名が宗五の來るのを待受て居ります、夜の更まする頃、覆面にて顔を包み降來る雪の中を宗五は茶見世へ参りまして、六人の者に對面を致しました、六人は宗五の姿を見まするや否や下へ飛退りまして、〇「嘘、御苦勞でムいましたらう、我々ども影ながら安否を待て居りました、シテ御都合は如何でムいますやと問はれた時に、宗「克御越下さ

死にましたる後は女房や子供の所は宜しく御願ひを致しまする、

〇「左様ならば貴下は直訴をして下さいますかと云ふ傍より千葉村の忠藏が進み出でられました、成程お前の言ふのは最もであるが、何うか宗五お前の役を私に譲つて下されたい命を捨てても不足のない俺は年じや、お前は老先の未だ長い身の上何卒俺を殺して下されいと云へば皆々勇み立、〇「イヤ此三郎兵衛を殺して下さい

〇「イヤ此の六郎兵衛を殺して下さいと進み寄を見て宗五郎は押止め、
宗「何を被仰います私が着手た事でムいますれば若し私が仕損じたる時には貴下方が後圖を次で断行して下さい宜しく御願ひ申しますと云ふ所へ豫て言付て置たる酒肴を持出す、宗「是が御別れでムいます一口いたいさますると七名の者が名残の盃を致しました、宗「御免と宗五が立上ると六人は我を忘れて袖を引留

〇「宗五郎殿、モ一是が今生の御別れでムひますかと云ひながらワツと泣出す

フシ「宗五郎は我が身を切れる思ひにて、別れを告て此の茶屋を立

出る、折しも聞る鐘の音を耳にはさんで黒門の此方の方までさ

しか、る雪は益々降しきり、見渡す限り世は白妙の銀世界』

此方より雪を踏分て近寄つて参りましたのは一人の小人なり、宗五の袖を確乎と

握り、〇旦那様御願ひでムいます、私どもは非人でムいます、物貰ひでムいます

何卒一文頂かして下さいまし、云へば宗五は回顧り

宗、オ、可愛い御子達、見れば未十にはならぬものであるが、お前は一人かへ

手、イエ然ではムいません、母親様も共々に御在でムいます、宗、左様かと云つて居

る所へ雪を踏分て近寄つて参りました、一人の女、年頃三十八九にして瘦衰へて骨

と皮ばかり頬骨高く眼は窪み宗五の前に平伏て生れて問のない女の兒を抱、涙を臙

して居る容子を御覽になりましたる宗五郎、宗、オー見れば御病氣の様であるが、シ

テお前達は江戸の人かへ何うして這塵に苦勞をして居られるのじやと尋ねかければ

此女が涙の裡に聲曇らせ、玄克御尋ね下さいました、妾は千住の者でムいます、夫

は相當に物の云へる御人でムいまして隣村と争論が出来まして、夫が御奉行の掛り

となり、村一同の者に頼れて、妾の夫が口出を致しました所が、其訴訟事はトウ

く、妾の夫の負となり、夫が爲に村の者にはアノやうな奴に頼んだから俺の村が敗

訴たのじやと云はれましたを残念じやと被仰いました病氣の因になりました、あ

の世の旅に赴きました、其時丁度此兒が七月になる折でムいましたが、大きな御腹

を抱へまして、二人の者を連れて千住を後に此の江戸の土地へ参りましたが、親類と

てもムいませず、何れへ便ると云ふ目的もムいませぬ、深川の邊に家を借どうやら

暮して居りまする裡に、漸く此の兒を安産いたしました、然し有つた御金は悉皆費

消つてしまいましたして衣類とても無如何する事も出来ません故、子供三名を伴れまし

て毎夜、江戸の土地

フシ、アチラ此方と彷徨て他人様の慈悲を乞ひ、ホンの温湯の一椀

を分て、親子が露命を繼ひて居まする、惘然と思召し遊ばさば只

一文の御合力、宜しく願ひ奉るゝ、女心の淺間しさ深く明せし身の上を聞いて、宗五は目を拭ひ、今日は他人の身明日は我が身他の事は思はれぬ、貰ひ涙に咽ばれる』

宗能が話を下さいました、ア御氣の毒な事でムいします、然し今に其兒達が成長なれば何とか工風も附ませう口では云へど心の裡、恰當自分の身も此通り、今は和當に申云へる宗五じやと云ふて、二百二十九ヶ村の者に頼まれて、此の東へと志し命を賭ての此の働き首尾能届は能けれども、失錯なつた其時には汝のやうな奴に頼んで置た其が爲、失錯したと云はれた時は、末代までの身の汚れ、妻や吾が子は住馴れし岩橋村を後にして人の合力を乞ふ事になるであらうと思へば今の話も他人の事とは思はれず、我が身にひしと感じました、

コ、テ烏渡御諸君に申上げて置ますが、讀人に由ますると、此の子持の女の物語を聞いて女房や我が兒に會たくなり國表へ宗五は立歸つたと云ふ説もムいしますが、

至つて足ぬながらも隅右衛門は左様ではムいしません、最早江戸へ來る時より命は捨ると決心した宗五郎、今となつて高の知れたる女乞食の物語を聞、其で心が變つて國表へ、未練がまし、歸るやうな木内殿ではムいしません、借是時に宗五郎はニツコリ笑を含み、懐中より取出しましたる金子五兩、宗之をお前に進せる程に何うか子供に綿の入つたる衣類の一枚も着せて上げませい、感冒なぞ引となりませんぞヨ、人間は若い時には笑ふて御暮しなさいまし、嬉しい時には泣いておくらしなさいまし、イヤ夫では此所で、御別れを致しませうと行にかゝつた其時に

フシ『親子の者は宗五郎の厚き言葉を忘れ兼、傍へ近寄、旦那様御恩は決して忘れませぬ、と袖引止めて云ふやつを、宗五郎は時刻おくれて黒門を閉られては困ります、と振切りく立去りました、黒門の此方なる通用門を排てもらふて内部へ入りました、

延壽院より借受たる部屋の裡、只茫然と控へたり』

後方へ立たる延壽院様、馬、オ一宗五郎、モ一御歸りになりましたか、宗、ハイ貴僧の御執成にて別れを告て参りました、馬、イヤ夫聞て安心いたしました、然し貴下には女房子もあると承はりました、是から國へ鳥渡歸られて賣て女房や御子達に一目會ふて御出なされては如何でムいますぞ、宗、コレハしたり、今と成つて妻子の者に未練をかけ、國表へ歸るやうなる、私は不心得はムいません、況てや此頃下總近傍には役人ども徘徊いたし、私を始め名主の者ども立歸りなば、途中に於て召捕りくれんと、鶴の目鷹の目にて見張り爲る眞最中、今國表へ歸れば網に入る魚同前、折角爲途やうと云ふ直訴も水の泡と存じ候へば何卒此儀は御無用に願ひます、延、是はシタリ其御一言は御最もなるが、御直訴の當日までには間もある事、況てや直訴いたしたる其者の一家親族從類までも絶すと云へる御上の掟御身一人直訴の罪を以て死するばかりに非ず妻子の者までも悉皆重き所刑に行なはれる事なれば、

妻子を離縁勘當いたし、責ては妻子の者だけ、御助けなされたが宜しからう、又國表へ御歸りの途中萬端の事は御引受け仕る、御安心なされたい、如何でムる宗五郎殿と眞に親切なる延壽院様の一言に、暫く宗五郎は膝に手を置て默然と俯向居たるが、

フシ「今こなつて未練らしく國へ歸るにはあらねども、延壽院様の御言葉に背は失禮、又熟々考え見るならば、何にも知ぬ妻や子の命を捨させるは惘然の至り、離縁勘當してやれば妻子の者を助かる道理、コリヤ國表へ一度は歸るが宜からうと、思案なしたる

宗五郎』

宗「御親切に仰せ下さいます御言葉に甘へるやうでムいまするが、是から歸國仕りまする、延、左う聞けば萬事延壽院が都合よく計ひます、今晚は御緩々と御休み

なさい、其夜は睡み、夜が明ると延壽院は文箱の中に手紙を入れ、之を寺男の源藏を招で其方是より下谷阪本へ參つて、伊勢屋長兵衛に直に來てくれと云ふて此手紙を渡して參れ 源心得まして云います、寺男の源藏は雪を凌に合羽あり饅頭笠を冠ひて

フシ「上野東叡山を後になし、急ぎ來たるは下谷なる阪本町、他人に親分親方と尊敬されて、強い者なら向ふ面、弱い者なら助けて行、義侠に富し男とて、家の渡世は東叡山に御出入の昇夫の頭を勤め居る、伊勢屋長兵衛の此家へ持て來ました、文箱なり手に受取つて長兵衛が、他ならぬ命の恩人、延壽院様の御招きならば、行かすはならぬと、乾兒を連て雪の中を厭はず、雪除の付たる足駄にご身を載まして、伊勢屋と云ふ傘にて雪を凌で、急ぎ參りし

は東叡山、委細を聞て引受たる長兵衛が宗五を伴て、國表へ歸る途中の苦辛談一息入れて復申し上げまする』

第 十

是時に伊勢屋長兵衛が延壽院様の御住居まで參りまして 長御招に預りまして參りまして云います、何か御用で云いますか 長オー長兵衛お前に改めて云ふではな

いが、過去ぞやお前に預けて置た命が入用だが 長へエ御院代様被仰るまでは云い

ません恰當今年より七年以前の事で云いました、時も三月所も恰當向島、酒に喰

酔つて十六人を相手にしての大喧嘩、トウ／＼二人まで殺してしまい、町奉行に引

出され、モ一助からねへと云ふ所へ命乞をして下すつたのは御院代様其時貴下の御

言葉に貴様の命は貴様に預てやると被仰いました、今迄無利息で御預りいたして居

りました、何時御返済して宜からうかと夫のみ思つて居りました、夫では今日が

御返し申す期限になりましたか、宜ふムいます何卒御受取り下さいましたと云ひながら自分の帯で参つた脇差を引抜、我が腹へ突立んとする奴を、其手を確かりと押へた延壽院、

延「マア暫く待長兵衛、今コ、テ死ぬる事には及ばんぞヨ、其命を賭てお前に働いて貰ひたい事があるじや、長ソナラ命を取に非ずして命を的に仕事をしると被仰いませぬか、如何事か存じませんが、命を的に掛ましたら出来ねへ事はムいませぬ、何事なりとも、屹度仕途で御覽に入れます 延能、云ふてくれました

フ「ソレト眼で知らずれば、傍の襖を排き、縞の衣類に縞の羽折小倉の帯を結まして、何か心に苦勞があるか、顔の色も蒼白たる一人の男が延壽院の傍に坐しました」

是時に延壽院は聲をひそめ 延長兵衛や、此方は宗五郎と云ふて、下總印幡郡佐倉領岩橋村の名主であるが、今度云々の譯を以て命をかけて江戸表へ参られたのじ

や、夫に就ては一度國表へ連れて歸るやうお前の働きで爲て貰ひたい、と云ふは佐倉領の役人が鶴の目鷹の目で宗五殿の歸りを待つて居るのじや、其中を無事に送つて復江戸へ連れて歸つて貰ひたいのじやが出来やうか 長承知いたしました、何大丈夫でムいます、何百人役人が綱を張て居りまして、ソナ事に驚くやうな私しではムいませぬ、私の子分にも命知らずの奴もムいまするし、何うとかして御連申しませう、併し御院代様へ宗五旦那を此儘で御連れ申すのでムいますか

延「イヤ夫では到底行まいから、一品親王の御位ある、宮様の御乗物を拜借いたして、其駕を表面は空駕と見せて其中に宗五殿を入れ、下總街道へ差かゝり、若役人が来たならば此駕は、宮様の御乗物にて、先達て御忍びにて成田の不動様へ御参詣に御出遊ばした爲、後より御迎に参るものじやと云ふて、云ひ脱るが宜しからう、又宗五殿を見られたらば好やうに分疏して通行致するやう

長心得ましてムいます、及ばずながら私が其御駕さへ拜借いたしますれば美事御

連申しませう、恁ふ云ふ間も心急でムいますから御暇をいたしまする、萬事打合して伊勢屋長兵衛表へ指て出ました

フシ「今まで降て居りました雪は次第に歇で来て傘は翳ずに若い奴、二本擔ひで東叡山、後に眺めて下谷なる阪本町へご戻りける」

歩行ながら長兵衛は獨言 長「感心な男だナ、アレが眞の男だらうの太郎ヨ、アレが本統の男だらうの、若い奴は何にも知らないから ○「へエ、先刻向ふで會た男でムいますか、成程好男前でムいますね

長「何を云やアがる、男前の事などを云やア爲ねへのだ、此間拔野郎め、ソナ事を云つて居るから何時も飯焚をして人の下を働かなければならねへ、氣を付ろ、若い奴は驚いた、何で親分は今日に限つてソナ事を云ふだらうと不思議に思ひ、後から尾て来る路なら一二丁來た時分に 長「眞に好男だ、二百二十九ヶ村の爲に命を

捨る心は實に感心なものだナ太郎 ○「親分俺は何にも知りませんヨ

長「馬鹿奴郎、親分の云ふ事を聞きやアがつて何にも知りませんと云ふ奴があるかへ、假令知らねへまでも左うでムいますかと、返答するのが親分への忠義だ間拔奴郎め、ソナ事を云つてゐるから毎までも人の下を働らかなければならねへ

○「オイ、何方にしても劍突を喰ふつてソナ馬鹿氣た事はねへや、親分御歸んなさい 長「歸らなくつてヨ俺が家だ、ドン、と行のを尾て參りました子分が戻つて來た阪本町 ○「親分御歸んなさい、長兵衛は子分の顔をチツト見廻して 長「四天王は何した ○「今二階で骨牌を弄て居ります 長「又四人揃つて悪戯を爲て居るのか馬鹿奴郎と云つたるま、階子をドン、と登つて參りました長兵衛が

長「若い奴等 ○「イヤ親分長「お前たちは俺の爲には四天王だ、ソナ事が出來ても命を的に働させよう云つたが、サア今日は命の捨時だ、ウント働いて貰ひたい、聞て四人は着て居る看板を後に脱捨、喧嘩刀を提げて二階を走下てゆかうとするを

長「ヤイ待、何所へ行のだ。○」親分知れた事だ、命を賭て働いてくれろと云ひなさるのは、お前さんが他所で喧嘩をして敗を取つたのでムいませう、シテ對手は何所に居りますね。長「マア周章た奴があるものだ、喧嘩じやアねへや、其命を捨る的下總にあるのだ。○」エ、相手は下總ですと、何だ馬鹿くしいと四人は看板を着て聲を揃へ。○親分何う云ふ理由でムいます。

フシ「四名の者を傍に寄で、今日延壽院様の御住居へ行ば、恚ふく斯やうの話しあり、男の中の男と見込れ、頼まれた上からは後へは退れぬ長兵衛だ、お引受申した其上は、命にかけてもやらねばならぬ、夫故何うか汝達も一と働き致してくれよと頼むと、長兵衛が云ふのを聞いた四人の衆、我を忘れて立上り、ソナ事なら命にかけて断行ませう、親分心配なさいまするナ、子分一同は

喜んで祝の酒宴を催した、夜の明るのを待受けまする、明る朝になりますます、急ぎ來たつた上野の山内延壽院の住居なり』

長「御早ふムいます。馬、オー長兵衛か、克來てくれた、先程より待つて居た、駕の用意も出來てあると云ふ中に宗五郎は旅刀を持つて駕に入りまして、宗延壽院様夫では行つて參ります、長兵衛殿よろしく御願ひ申しますると駕に乗と戸をピツシヤリと閉る、上より帛を掛けて空駕と見せる、四人の者は駕を擔ぎ、伊勢屋長兵衛は駕の脇に附添ひまして江戸の土地を離れまする。

フシ「急ひで下總なる葛飾郡を通り抜て段々急で參りまする道すがら、佐倉領地へ來たりまする事なれば、右と左りより役人ごもが取巻ました。』

怪きは其駕なり取調べくれんと、傍へ接近て參りまする容子、夫と見て取る長兵

衛が調べられては一大事と、故と聲を張揚て、長若い奴、上野の宮様も餘りと云へば御手輕じやアねへか、御忍びで成田山へ御參詣、是通り俺達が空駕を以て迎ひに行つて、若や御在になれば宜けれども、又御忍びで御歸りになつたと云はれたら、此通り御迎ひに來たも水の泡、骨折損になつてしまふの

○「親分然でムいますヨ、何故ソナ事に成たのでムいませう、サア早く參りませう、眞急ひで行つてくれと行過るを役人どもは聞まして、役「オヤ、夫ではアレは空駕であるか上野の宮様を御迎に行人足と相見ると調べも致さず見脱して行

フシ「ナラリと看めた伊勢屋の長兵衛、態ア見ろ盲目役人、木内宗五を召捕らんと、鵜の目鷹の目の網張の最中でありながら、見脱し行は阿呆な奴と、子分顔を見合はしてニツコリ笑つた長兵衛が、幸よしと急ぎまする、彌々宗五子別れの一段、次なる段

にて申し上まする。」

第十一

フシ「此時に伊勢屋長兵衛は若ひ奴にご駕を擔せて、急いで來たワ
安治木の宿の中程なり」

傍らを見ると安治木屋と記したる旅宿あり、茲ぞ宜らふと表より、長御免下さい夫れへ婆アさんが居りましたが、婆能くお出下さいました、サア何うぞ此方に御上り下さいまし、長江戸の方から遣つて來ました者でムいますが、何うか一晚御泊なすつて下さいまし、婆サ、アお泊りを願ひます、長若い奴夫れと云ふ聲諸共に駕を擔ひで奥に入り込んとしたを親父殿が飛んで參りまして、婆「若しお客さま鳥渡お待なすつて下さいまし、何うも困りますぢやアムいませんか、駕を奥に擔ぎ込れては迷惑に存じます、何うぞ御待ち下さいませ、長馬鹿な事を云ふナ、此の駕は勿体な

くも上野の宮様が御乗りなされる御駕で、若し此の駕を土間に捨て置いて、鼠か小便でもしツかけるとか、お前達が手水でもかける事でもあれば、家内残らず命が無エぞ夫れを覺悟なら土間に置ても宜ひ 蓋夫れは困ります、左う云ふ事なら何うぞ奥に持て往つて下さい、して貴下様方の御所は何れでムいます、お名前は何んと被仰いますか、何うも此頃はお役人の御訊問が嚴敷ふムいまして、若し名前町所を承はらずにお泊め申したと云ふ事が知れますると、宿屋商賣を差止めると云ふ事でムいます所を仰せ下さいまし 長何を云つて居るのだ、爺さん、そんな事を心配するには及ばねエ、若し役人が來たらお前の迷惑にならねエやうにしてやらふと、其儘奥に通ります、直ぐに皆んなで夕飯を食す、駕の中より宗五郎を出しまして、サアお喰りないませ、と云はれた時に宗五郎、ハラ〜と膝に涙をながし 宗御親切に御世話下さいますして有難ふ存じます、たとへ死んでも此の御恩は忘れません、涙片手に御飯を喰べやうとした時に、坐敷の外に足音が聞へる油断が出来ない、と壘をまく

り根太板を取つて、宗五を床下に隠し知らぬ顔で控へて居る襖押し開ひて、佐倉の役人十二三名夫れへ入り來り 役是れ汝達は何れの者であるか 長へエー私は下谷坂本町の伊勢屋長兵衛と云ふものでムいます、是に居るは私共の若い者でムいます 咄左様か、此の宿屋の亭主が申すには其方共は住所姓名を云はず、其儘奥に踏込んだる由、實に怪しからん事ではないか、第一怪しきは其駕である、と云ひつゝ、役人がバラ〜と駕の傍に近寄つて參りまして駕に手を懸けやうと致したる時に伊勢屋長兵衛が、役人の前に仁王立 長若し御役人様少し待ておくんなさいますし、此の駕は上野の宮様の御歸りなされるお駕で今は空でムいます、然し其の尊ひお方のお乗りなされる御駕に無暗に手をお懸けなすつたら、其分には濟みませんぞ 役何に宮様の御歸りなされる御駕だ、是は大變かゝる尊き御乗物に不淨役人共が手を懸ける事は叶ふまじと云へば、傍より中山藤藏と云ふ役人進み出で 中「コハ御同役何んたる事を仰せなされる、怪しきは此駕なり、取調べて宜らふ、と

云はれ又進み寄るを伊勢屋長兵衛は、長夫れぢやア何うしても御調べなさるんてん
 いますか、若し駕の中に怪しい者の居ねエ其時には何んとなさいます
 役「其時には吾々ども腹割さばいて申し譯致するわい、是は面白い、夫れじやア
 お調べなすつて下さいまし、役然し町人此の中に怪しい者が居つたら其時には何ん
 とする、長御念には及びません、若し駕の中に可怪な者が居りましたら、私達五人
 繩を受け重き御刑罪に行はれましても不服は申しません、
 役「能くぞ申した、夫れ調べると役人ども近寄り、駕の戸を開ひて中を見ますれば
 蟬の抜空、身は何處へやら」

フシ「甚ひ事になつたと役人どもはこそくご坐敷を出て逃げん
 ごするを、ヒヨイご眺めた伊勢屋の長兵衛、逃してならんご聲か
 けた四人の命知らずの若衆が、向ふ鉢巻締込んで喧嘩刀を引抜

ひて逃げるものなら逃げて見よご、グルリご周圍を取巻
 た」

役「是は恐れ入つた、吾々共が悪かつた、何うか切腹致する丈ケは免してくれ、其
 替り汝達に此の通り詫を致するから、長左うしてお詫を爲さるなら宜ふ坐います、
 此の後宿屋杯に出て来て餘り手嚴敷御調べを爲さいまするなヨ、
 以後決してケ様な事は致さん、イヤ飛んだ事を致した、御免くと役人ども表をさ
 して逃げてゆく、

フシ「跡を見送つたる伊勢屋の長兵衛、意久地の無エ役人ども、馬
 鹿野郎ご苦笑ひ、直ぐに宗五を床下より引出して、夜の更るのを
 待受る、時分は宜しご長兵衛が宗五を連れて宿屋の裏手、切戸を
 ソツご押開けて」

「長サア往つてお出なさいまし、一時も早くお歸りなさいませ、随分ともに途中御用心を爲すつて、幸有難ふムいます、夫では是で御別れを致しませう、雪の中を宗五郎はトボく〜と参りました道すがら、向ふにノツンリと立し人影、思はず後ろの方へ二足三足踏跟て旅ざしの柄に手を懸け、役人なるかと雪あかりに透して見ますれば、人にはあらで案公子、

フシ「傍へ近寄り宗五郎、案公子云へるものは、米の實る其時は雀を除る役を爲し、稻を蒔たる其時は、不必用ものご田の中に捨てられる、恰度我身も是と同じ事、此度將軍家に直訴爲し、二百廿九ヶ村の命を助けた其時には、神よ佛と云はれるたらふが、若し仕損じたる其節は、村人につま弾きをされ、剩さへ重き御仕置を受け、身体は鳥の餌食になる事かご我を忘れて歎かれる』

斯様な所で泣て居る場合でない、人目にかゝらぬ其内に少しも早くも心急きたち急ひで参りましたのが吉高の渡、此の渡を芝居で致しますと間々の渡と申しまするが眞實は吉高の渡と申するのでムいます、渡守の甚兵衛小屋の内に只一人、爐に焚火を致して溜息を吐ながら、

「甚ア一此の取立の殿敷ひ事佐倉一統の者は皆困り居る、夫れに就けても宗五郎旦那さまを始めとして、六人の名主の衆、江戸表へお越しになり、御苦勞を爲されて居ると云ふ話しちやが其後少しも便りもなく、ア一今頃は何處にお在なざる、やら此の間も俺が宗五郎様の御宅に往けば、御新造様が涙をこぼして、旦那の御噂を爲すつたが、思ひ出すのも涙の種、此の下總の佐倉領に江戸に往れた名主の衆は一人として通行は爲せぬとの役人衆が鞆の目鷹の目の網張りの様子、迎も是では歸れまい、ア一困つた事だなアと思案の所へ表より、静に戸を叩き、
案「是れ甚兵衛や、是れ甚兵衛 甚何んぢや、甚兵衛ぢや、悪ひ狸か狐めが俺が今

宗五郎旦那の噂をして居れば、早や旦那さまの聲色を遣ふて來居つたか、此間も夜中に甚兵衛起てくれろ、此所を渡してくれろヨと大きな聲で怒鳴るから、借は御役人様かと起て見ると誰も居らなんだ、サア今日と云ふ今日は此儘には捨て置ぬ、汝何うするか見やアがれと、櫂の折を提げてガラリと戸を開け飛んで出で

甚「ヤイ汝れは狐か、斯うしてやらふと打てかゝる体をひねつた宗五郎、流れる甚兵衛の櫂を引つつかみ 甚「甚兵衛狐狸ではない妖怪ではない、私ちや

甚「イヤ貴下は岩橋村の宗五様でムいましたか、ソコデは御話しがなり兼ねます、

イザ此方にお入りなすつて下さいまし、と手を取て小屋の内に連れ込んで、ピツシヤリ表を締め 甚「お寒い時分でムります、此の爐に足を暖めて下さいませと云ひながら粗朶折くべまして、甚兵衛は若しも人目にか、つては一大事と、傍にあつたる笠で宗五郎を圍ひ、聲頼はして 甚「旦那さま貴下様は嘸ぞ御苦勞を爲されました事でムいませう、何う云ふ江戸の方は都合になりましたか、早ふ御聞せなされて下さ

りませ 宗「イヤお前の質ねが無ふても話すつもり、江戸表へ參つて手を替へ品を替へ色々とお願ひをしたが、更に御取上げなく、此度俺は四代の將軍家に御直訴を致しまするのじや 甚「エー、アノ直訴を……

宗「俺が女房子供に罪を着せるのは不愼じやと思ひ、離縁狀に勘當狀を遣らふと思ふて遙ばると歸りました 甚「左うでムいますか、夫れは嘸ぞ御心配な事でムいませう 甚「サ、斯う云ふ間も心急く、甚兵衛早ふ渡して下されヨ、

甚「旦那様お氣の毒ではムいますが、此の渡場は暮六ツから夜曉の鐘の鳴るまで、渡す事の出來ぬやう、御役人様が參りまして、鎖をもつて船を繋ぎ錠を下して置れます、若し是を切る時には、其の船頭は磔に行はれると申します、云はれ向ふで親が死ぬるを此方で子が見て居ても、朝にならねば往く事の出來ない、と云ふ實に恐しい政治でムいます、是れと云ふのもお名主様が若しや歸りは爲まいかと役人どもが召捕る心で、斯様な嚴重な事を致してあるのでムいます、折角のお頼みながら御

渡し申す事はなり兼ねます。

フシ「云はれた時に宗五郎、如何はせん、情けないはるく江戸より國表へ役人ごもの其中を此所まで來りし甲斐もなく、逢はずに江戸に歸るかこ、最ご情けなく思ひまして、甚兵衛に別を告げて小屋の外へ立出て、向ふを見れば戀しやな天神の森も幽かに見へ、此方の方白の壁は、公津新田岩橋村木内宗五の藏の壁、向ふに我家を見ながらに逢はずにゆかねばならぬかこ、暫し涙にくれ居たり」

宗「若し遅なわつてはなりません、夫れでは江戸へ此儘に引ッ返へしませう、甚兵衛殿此の離縁状と勘當状をお前の手に渡して置きますから、何うぞ委細の事をおるんに物語て是を渡して遣つて下さいましと、甚兵衛に二通の書付を渡し、其儘往ん

ど爲したる時に甚兵衛堪り兼、甚若し旦那さま、鳥渡お待下さいまし、何んとして貴下を是から江戸へお歸し申す事が出来ませう、跡は何うなりと都合よく致しますから早く船にお乗りなすつて下さいまし、宗五の手を取り船の中、宗、甚兵衛夫では私を渡してくれるか、甚渡さないで何んと致しますせう、御心配爲さいますナ、こんな、鎖は何んでもない事と云ふより早く、持ち來たる一挺のなた、兩の腕に力をこめて、甚南無不動明王私に力をお貸し下さいまし、云ひながら鎖を打と、ブツツリ切れて其船は川の中を望んで進みゆく。

フシ「宗五はアツと驚ひて、甚兵衛短氣な事をしてくれたこ、云ふをも聞ず甚兵衛は、向鉢巻捻込んで船を急がせ鎮守の森の此方に着けました、宗五は喜び甚兵衛に別れて我村指して歸へるこ云ふ下題中での御聞き所、宗五子別れの一節は、次なる段にて辨

じませう、

第十二

「哀れは茲に宗五郎、妻子を捨て東路へ苦勞を重ね、立歸る、岩橋村の我が家の門口」

宗五郎の宅では女房のおさんが夫の身を案じながら子供衣類を縫て居ります。旦那様は江戸へ御越なされて、夫から何の便もなく、次第に此村も淋くなるばかり、此容子では一年と過ぬ裡、皆餓え死するは必定、何うしたものであらうか、親の心子知らずとやら、父様は何うだ御父上は何れに御出なされたかと、日毎にたづねられる度毎に、妾の胸は張裂ばかり、早ふ旦那様が御歸りなされば宜いと獨言の所へ、表へ來たる宗五郎、我が家ではあるが、今では忍ぶ身上故、聲を出す事も成兼て、裏手へ廻り、聲ひそやか、宗コレおさん居るかや、女房ども、おさんは之を

聞付て、「アノ聲は確に夫宗五郎殿、借はお歸りなされたか、ドレ排て進せやうと立上つたが又坐り、」イヤ〜過日も夫の聲色を遣ひ、印幡の喜右衛門が來て、何とやら彼とやら主ある此身を取らへて猥らしい話ばかり、若しや又喜右衛門が來たかも知れぬ、排て置ぬが宜からうと又絶物に取かゝる

「コレさんや私じやわへ、宗五じやわへと云ふ聲は正に夫宗五郎、思はず立て裏手なる戸を引排て、互に見替す顔と面、」貴下は旦那様ではムいせんかと云ふ聲高しと口に手を當、「コレ静に爲なされヨ、他人に聞かれては大變じや、後を早く締て下され、上り端に腰を掛、首うなだれて宗五郎は控へ居る

「旦那様、何う爲されたのでムいまする、是程御役人が綱張りをして居る中を、克マア御無事で御歸りなされて下さいました、是で妾も一安心

「ッイヤ俺が今日戻つて來ましたのはお前には濟ぬ事ながら離縁状を取つて貰ひ吾が子には勘當状を渡したいと思ふて、何にも云はず、之を受取て置て下され、おる

んは聞て讀もせず、其離縁狀を打付て

「夫は情けない旦那様、實は慙ふじやと話して、何故得心さして下さいません、歸るが否や離縁とは聞えませんと泣伏た」

宗「お前の云ふのは最もじやが、今度俺は四代將軍家へ直訴をいたします、直訴を爲れば我身は勿論、妻子はじめ御類等を絶すが天下の掟、死ぬる吾身は厭はねども後に残つたお前達を惘然なものと思ひますから、實は慙ふして役人どもの目を忍んで歸りました、早ふ之を受取て下されたいと云へばおさんは頭を振

「夫婦ご云へる其者は善時ばかりじや御座いません、貴下が重き御處刑受た其時は妾も共に罪を受、互に死んで其後に死出の山路や三途の川、共に手を引、あの世に參り、夫婦ごなつて暮す心で御座いまする、其様な淺間敷三行半は頂き度は御座いませ

ん妾も共に殺して下さいませと宗五の膝に泣伏したり」

宗「夫はお前聞分がないと云ふものじや、お前は如上で宜けれども、西も東も知らぬ子供が惘然じやムいせんか、然云はずに何卒受取ていたいたたい

三「夫では旦那様、妾は矢張夫婦でムいますが、子供だけには勘當狀を遣つて下さいませ 宗「ソソ然でありますか夫ではお前は共に死んで呉まするか、何にも知らぬ子供には罪はない、此の勘當狀は預つて置て下され、慙ふ云ふ裡も心急、ドレ是儘別れて行ませうと立上つて行かんとする、虫が知らすか奥の間より飛で來たつた兄の宗平次男の喜六、宗五の兩袖に取纏り

二人「御父上御歸りてムいまするか、坊は賢ふ待つて居りました、モ一何所へも行って下さいまするナと云はれて宗五郎は兩人の子を抱上げ

宗「オ一父が居らぬ其不在は兄弟喧嘩も致さず温和く待つて居たか、可憐奴だナ、父様は遠い所へ行度は無が、何うも據なく、又遠い所へ行かねばならぬのじや、今

度歸る時は御土産を澤山買ふて來て遣る程に、夫を樂みに待つて居や、次男喜六は顔を上げ、喜父様、今度御歸りの時には馬に乗つて槍を擔げた人形を買ふて來て下さいませ、聞て宗五郎は、幸何、馬に乗つて槍を擔げた人形を……アノ人形をフシ年齒もゆかぬ子供さへ今の言葉は虫が知るか、馬に乗て槍を擔げるは今の今、直訴いたした其罪で、裸駒にて乗せられて鎗を擔がせるは必定、コンナ可愛子を捨て死に、行かねばならぬこは、思へば此世はあぢきない、イヤ、左に非ず、十有萬の人の爲、死する命は惜からぬ、後の世までも名を残し、木内宗五は天晴なりと云ふて貰ふが樂みぞ」

宗宜聞分て温和く阿母ア様の云ふ事を聞て居が宜ぞや、モ一別れて行ますぞやおさんと、一足行にか、れば奥よりワツと泣出す三男三之助の聲、お三は立て三之助

を抱宗五の前へ参りましたして、三日那樣是通り成長なりました、責ては此兒を一目なりとも見て行つて下さいませ、幸、オー、三之助、成長なつたのと赤子を抱て顔を見と、今迄泣て居りましたる兒が泣止宗五の顔を打看め、夢の如にニヤと笑ふ、幸お三や之を見なされ、子供を捨て先達て行、私のやうなものでも親と思ふて、今抱てやれば早泣止で俺の顔を見て笑いますると涙を拭ひ赤子をお三に渡し置、幸、夫早く草鞋と云ふ聲に宗平と喜六の兩人は立上り、右と左りに草鞋を持て阿父様之を御穿なされませ、幸、オー、忝ひと宗五郎は夫を穿しめ引廻し合羽を身に纏ひ、濡たる笠を手に持て女房子供の留るのを振切り裏手の方へ立出ました、フシ、宗五は我が家を出て一間ばかり進み行、お三は兩人の子供の手を取り、丸窓の所まで接近て、お前達は父様を見送られたが宜からうと云へば二人の子は透窓に抱付て首延へ、若し父様御父

様ご云ふを、他人に聞かれてなるまじご二人の子供の口を押へ
たお三が手を當る、二人は聞分あらばこそ母の其手を刎脱て、父
様ご呼ばはる聲に宗五は後髪を引かれたる心持、一足出ては復
戻り二足出ては後方を向、行つ戻りつ、ごつおいつ、暫は待て後
に見取れて居りましたが」

フシ「屹度心を取直したる宗五郎、是は恚しては居られぬご、雪を
蹴立つて水神の森へ急ぎ行」

待受居りました甚兵衛は、甚「サア之へ御乗り遊ばせやと宗五を乗
堀に着ました 考借て甚兵衛、お前は此鎖を断つた上からは所詮此土地に居る事は
出来まい何れいか發足するが宜からう、零時身を隠して居る裡にも先立ものは金ば
かり、サア茲にある五兩其方に進せるに依て、之を食糲ぎにして下總が安泰に治ま

つたらば又還つて來るが宜からうぞと五兩の金を甚兵衛に渡して道を急がれました
其トタンに前面より一人の男が通りかゝり宗五と摺違つたる時、一間ばかり行過さ
せて後方より「オイ夫へ御出なさいますのは岩橋村の宗五旦那じゃアムいません
かど云はれて宗五郎も今と成つては包み隠すも出來ず、後へ戻つて笠を取り

宗「オーお前は印帳の喜右衛門か、久瀬じやナ 喜旦那、貴下は大層今度御骨折な
さつて居るさうでムいます、先日からモ御歸りかと待て居りましたが、コ、デ遇
たのは幸ひ、喜右衛門の細にかゝつて郡奉行の邸まで御出成すつて下さいまし

宗「イヤ喜右衛門殿、お前は役柄で然云ふであらうが、何卒今日の所は見脱して下
されイ、俺は二百二十九ヶ村の人の爲命を捨て此有様、お前に今召捕られるとなる
と今迄苦勞した事も水の泡、人は仁慈の下に住むとやら、御願ひじや、コ、は見脱
して下さい 喜幾ら頼んでもソナ事は出來ねへ、此方が温厚宗五旦那岩橋村の名
主様と云へば附上り、見脱してくれとは何だ、ソナ事を見脱して居ては役人で飯

が食ねへ、御用だと云ふと持て居りました赤房の十手を取つて打てかゝる、宗五是非なく合羽を刎て旅帯を引抜き切り込み來たる、何を爲やアがると兩名暫く争つて居りましたが喜右衛門の爲に持し刀を打落され宗五郎は後へ飛下る跳り込だ喜右衛門が取て押へんとなしけるを宗五は雪を握んで投付る、喜右衛門チヨコザイなりと宗五郎に打つてかゝる、其裡に宗五は身体勞れ渡つて雪の中へバツタリ倒れる、た喜右衛門乗かゝつて首筋をグツと押へて馬乘に跨り

喜態を見ろ、手逆へをしても及ばぬ事だサ此上は擲てやるのだ、オヤ、此件は困つた事をした俺が今持つて居た早繩を何所へ落してしまつた、何うも仕方がねへ下帯で縛つてやらうと下帯を取にかゝると宗五は下より力を籠て勿返さんとする、是時に喜右衛門が喜オーイー渡守の甚兵衛ヨ甚兵衛や、甚兵衛は五兩の金を宗五郎より貰つて一時も早く吉高の渡しを立退んとなしける時、甚兵衛と呼聲に何事ならんと立止り喜へエ、甚兵衛と被仰いますのは誰方でムいます

喜オー印幡の喜右衛門だ、今名主の宗五を召捕つた喜エツ、夫じやア、あの名主様を喜然だ岩橋村の宗五を召捕つた喜オ、あの宗五旦那を、夫はマア大層な御手柄を爲さいましたノ喜ウン、何でも可から繩を持つて來イ、繩を喜宜ふムいます、然し繩は貴下も持て御出でムいませうに喜落してしまつたのだ喜オヤ、痴鈍な話でムいませうね、盗人を押へて繩をなうと云ふのは愚ふ云ふ時を云つたのでムいませう、宜しゆうムいます、只今繩を進ませませう、なれども喜右衛門親方、其宗五を召捕つた上は澤山な御褒美が貰へるのでムいませう

喜然さ百兩と云ふ事だ喜夫では五十兩だけ私に下さいまし喜然張つた事を云ナ、十兩位は褒美に遣るから早く繩を持つて來い、是で捕縛つてなしなさい手渡し致す繩、宗五は下より聲を掛喜甚兵衛ヨ、何卒俺を助けてくれ、甚兵衛助けてくれ喜器な何を云ふのだ、此甚兵衛は科人を助けて何うするものか、召捕れたはホー運命の盡た所だ、能今迄江戸に有事無事持出して殿様の御耻を晒したナ、サア

コ、デ俺の腕を見せてやるから待てゐると云ひながら持つて參つたは赤檜の柄の附て居ります一挺の鍬、宗五を打と見せかけて、上に乗つたる喜右衛門の頭上をハツシと打碎く、アツと印幡の喜右衛門は打倒れる、周圍に在し其雪は早や紅となりました、宗五の傍へ近寄る甚兵衛 甚「旦那様、夫速く御起さなされませ、云へば宗五は息絶たか何の答へもムいませぬ 甚「イヤ是は旦那様は息を御失ひなさいましたかと背撫擦つた甚兵衛は雪を掴んで口の中へ入れ、オーイーと呼聲に、漸く息を吹返したる宗五郎 宗「甚兵衛か 甚「旦那様御氣が附ましたか、喜右衛門は殺してしまいました 宗「エツ、喜右衛門を殺したと、夫はマア飛だ事をしてくれたナ 甚「何構はムいませぬ、旦那様後々を御心配なさらす一時も速く 宗「有難ひぞやと別れを告た宗五郎雪踏分て一散に走出す、後に甚兵衛只一人、喜右衛門を殺せし上は生て居られぬ吾が身の上、死で宗五旦那の御身の上を護らんと思ひ定め、大なる石を吾が身体に縛り付たる其儘、吉高渡の深淵を望み一足縮めて飛込だり

フ「宗五は命の無場合を甚兵衛の情に由て助かりて、脱れて來たる安治木なる旅宿へ無事に着きました、伊勢屋長兵衛は大に喜び、再び宗五を駕に乗せ、東を差て連歸る、上野山内御直訴の一節は一息入れて次の段」

第 十 三

フ「讀殘しに相成りました木内宗五の御話を」

儲て是時に宗五郎妻子の者に別れを告げ、吉高渡しで喜右衛門に押へられたる危難を、甚兵衛の爲に助けられ

フ「脱れて來たる旅宿なり、伊勢屋長兵衛悦んで駕に乗たが、サア是から江戸の土地へ急がんど、木下しより船にて東へ來たる心

にて滑川にご急ぎまする』

滑川村の入口まで参りますと地藏堂がムいます、其先方から御用と云へる提灯を把つて役人が七八人ドヤ〜と來たる容子、伊勢屋長兵衛驚ひてコハ油断ならずと目配せ爲る役人と摺ちがつて行かんとするを

役「待、夫へ参るは何者であるぞ 長「私は江戸下谷阪本町の者でムいまして、上野の宮様を御迎ひの爲、只今成田へ行つて見ますれば、早宮様は江戸へ御歸りと聞まして、遅れ走に木下しから船で江戸に歸るのでムいます

役「何、夫では其駕は空駕か 長「左様でムいます 役「汝達の申し立最であらうが上役人と致して一應調べねば相成らぬソレ其駕を調べよと云ふ聲諸共役人近寄り駕に手を懸けんとしたる時、伊勢屋長兵衛モ一是迄と思つたか、喧嘩刀を引抜ひて切てかゝりまして、四天王の者共同じく命を的に脇差を引抜て切てかゝる駕の中では宗五郎旅帯の柄に手をかけ、容子によつては切て出やうと急たつ胸を押へて熟と見て

居ります、

フシ「幾何必死に働ひたごて相手は腕ある役人が七八人の事なれば次第に危くなりました、伊勢屋長兵衛一家の者、思はず後ろへ切りたてられ』

フシ「傍らの高敷を押分け飛んで出でたる三十四五人の頬冠りせし曲者あり』

物をも云はず役人の頭に袂又袖がらみをば打込んで引づり倒し、打つもあり蹴るもあり、役人ども驚ひて夫れ敵はぬとバラ〜と逃げ去りました、夫を見ました伊勢屋長兵衛 長「何誰かは存じませんが有難ふ存じます、何れ御禮を申し上げます、と一弾残して怨を擔ひで急ひで往く、跡に残りました曲者どもは皆顔を見合せて

○「オイ太郎作ヨ、是で一ツの役が済んだ、早く歸らふ 太「合點だと其儘急ひで歸り來りましたのは滑川村、庄屋吉兵衛の門口 太「御庄屋様今歸つて参りました、

「吉」オー御苦勞だツた。○「御庄屋さんの指圖によつて藪だゝみに待て居りまして斯うく斯う云ふ譯でムいます。吉」夫れは御苦勞であつた、早く歸つて休んで下さい。○「夫れでは御庄屋様貴下も御休みなされませ、と百姓どもは立歸る、吉兵衛は表を締めて知らぬ顔で奥に入る。

「所へ表の方面に傷のあるものもあり、足を痛めた人もあり、皆夫れに手傷を負て此所たぐい云ひながら庄屋吉兵衛の表を叩き、奥に寢て居た吉兵衛が、夫れ役人が大勢來たごんな風かど莞爾笑つて立出る」

「吉」何誰でムいますエ。役「吾々は當所の役人だ表を開けるモー東が白んで居るのに百姓の癖に何時まで寢て居るんだ。吉」御冗談被仰いますな、何時迄寢て居りませうとも夫れは皆な私共の自由でムいます、幾何寢て居りましても貴下方の御世話になる譯じやアムいません。役「此奴怪しからん奴だ、役人に向つて不禮な事を云ふな、

早く表を開ける、ガラ〜と戸を排けた吉兵衛。吉「サア御入んなさいまし、御役人様皆な御怪我を爲すつて居るじやアムいませんか。役「イヤ甚い目にあつた、實はしかくの譯で藪だゝみより出たる奴は當村の者と見受けたり、一と吟味致さねば相成らぬ左様心得る。吉「向私はそんな事は覺えはムいません、然し小前百姓を呼寄せる事に致しませう、門口にあつた竹ぼうらを吹く、之を聞くと當村の者ドン〜駆けて付けて參りました。○「御庄屋さま何んぞ御用でムいますか。

「吉」御役人様が來さつしつて斯う云ふ事を云はれるが、お前達は覺えがあるか。○「何んでそんな事を知りませう、夕べは彼の通りな雪だし、早く寢てしまひました、此の寒天に藪の中に隠れて居るやうな悪ひ事は致しません。△「私も存じません。×「私も知りません。吉「左うか夫れは何うも仕方がない、御役人様御聞きの通り小前の者は一同に知らないさうでムいますか、何うぞ外々を御吟味を願ひます、然し御役人様が此の通り御怪我を爲すつて居らつしやツて居るものを此儘にしては置

けません、只今醫師を呼んで御手當を致します、是れヨ早く醫師どのを呼んで來い
 ○「承知致しましたと醫師の家に駆け付けて來た小前の者
 ○「オイ毒庵どのお前に一ツ頼みがある、悪役人が怪我をして庄屋様の所に來てム
 るのだ、是から往つて痛む療治をして遣つて下さい、毒委細承知、甚ひ目にあはし
 てやりますとは是から參りました毒庵役人どもの疵口を調べ、
 「是は大變な疵でムります、並の手當では癒りません、少し痛むか知れませんが
 我慢をなさいまし、と焼酎で洗つて疵口を指で搔く、役人ども驚ひて顔をしかめて
 ホウ／＼の体で逃出したお話し替つて宗五郎は
 フシ「伊勢屋長兵衛に連れられて、江戸は上野の東叡山延壽院の御
 住居へ無事に到着致しました、喜びましたる延壽院が伊勢屋長
 兵衛諸共に座敷に案内する」

宗五は長兵衛に向ひ、素誠に此度は御骨折で有難ふ存じます、是は甚だ輕少でム
 いますが、此の百兩の金を貴下の乾兒に御遣はし下さるやう、何うぞ是で一口飲
 んで頂きたふムいます、云へば長兵衛辞退なく此の百兩を受取りました、後日宗五
 夫婦の者次臺にて磔刑になりました時、其百兩の金に五十兩足して百五十兩をもつ
 て宗五を始め妻おさん其他小兒の佛事を營でやりましたと云ふ、是が眞の俠客でム
 ませう、此方は延壽院殿、愈明日は四代將軍の御成と云ふ事に定まりました、前
 日より上野山内は誠に上を下へと云ふ混雜を致しまして、實に上野の御成と云へば
 大したもの、三代將軍御靈屋の御清門の入口は役人が數名之を堅め、決して無用な
 者は内へ入れず嚴重なる有様でムいます、其の夜更渡る頃ほひ宗五を寺男体にした
 つて、延壽院之を召連れ、御靈屋手前御清門の所へ近寄りましたが、之を堅めて
 居る役人ども夜更の事ではあり晝の勞で居眠りを致して居る様子、是れ幸ひと宗五
 を連れ延壽院、御影石の上を靜に門内に入り込みました、此時に延壽院宗五に向

はれまして。

フシ此の楷段の下で今宵一夜御待受けあれ、明日に相成つて四代の君が此の所へ御成になり、御清草履と云ふ聲のかゝりし夫れを合圖に必ず不禮を爲さらずに、靜に御願ひ遊ばされヨ、其方が無事に御直訴爲したと聞きつれば、直に延壽院は彼の世の人となりまして、其方がゆく所へ御件ひを仕つるぞヨ、云はれた時に宗五郎見えず知らずの私を夫程までの御志し、死しても忘れは致しません、暫時は頭も上らぬ様子、只涙にくれて居りました』
延壽五殿早ふ是へ御入りなされよ、と階段下に隠し置き、悠々として延壽院御門の方に出て参りました、門番どもは目を覺し、見ると御院代なり
門是は恐れ入りました、延私ぢやから宜けれ、他の者に見られては其方どもの落

度となる、大役を勤めながら居眠り致すとは何事である、以後氣を付けませいと云ひすて其儘此の所を立て向ふに御出になりました、木内宗五は今かくと待受け、夜の引明けの頃に御靈前に於て、三十六人の御出家が讀經をする、其聲を耳に挾んで喜んだ宗五、モ一御越も間近き頃ほひなり、と耳聳て聞て居れば、鈴の様な聲にて、○「只今上様千代田城御出門と云ふ聲を耳にはさんだ宗五郎、嬉しや千代田城を御立出に相成りしか、モ一御越は程もなしと待受ける、第二番の聲

○「上様上野山内御入りとある、其時早や讀經は止まり、音樂はさながら彌陀の淨土は此所であるかと怪しむばかり、御清御門の方まで諸大名を従へられたる將軍家はより御身近く召仕ふ家來六名を御連れ遊ばし、御影石の上を靜に歩せられ、階段の此方にかゝる傍より御家來、家御清草履と聲をかける、其時將軍進み寄り、御昔履を穿き替へんと爲した、其時階段の下より飛び出たる宗五郎

宗恐れながら上様に御願ひ申上ます、下總佐倉の領地岩橋村の宗五郎と申す者にム

います、二百廿九ヶ村になり代つて御直訴を仕つる、此の願書御取上げ下さるやう
と進み寄る傍らに控へたる人々大ひに驚き、宗五を夫れに引倒し、一寸も動かさず
狼籍者と申せし時、四代の君は御聲すいやかに「是れ手荒な事を致すな、何事か
は知らねど願ひの筋は聞届け得させヨ、鶴の一聲宗五の願書を四代の君に御手渡し
をする、御受取遊ばして其儘階段を上り、御靈屋の方に成らせらる、宗五は後手に
縛りあげられ、〇不禮者上様に御直訴をするとは何んたる事、宗五は夫等を耳にも
入れず、四代の君の後姿を拜せんと思ひしに、征夷將軍の御威光光々と現はれ、百
姓風情の宗五目を睥事も叶はず、ハツと驚き頭を下げて居ります、

フシ「延壽院は我部屋で宜き報知があるか、夫のみ待受け居りま
した、只今宗五の直訴無事に済んだと云ふを聞き、死んで宗五を
迎へてやらふ、ご御用意爲した唐木の經机の上に金襴の打敷を

敷せ、金銀張り分け鶉の香爐に名香を薫らせ、馥郁として鼻を貫
くばかり、身には白無垢を纏はれ八寸三分の懷劍を逆手に取る
や否、我腹へ深く突さし引廻した上、其懷劍を打直し咽の管を搔
切り物の美事に彼の世の旅に赴きました、是ぞ眞の釋伽の御弟
子、延壽院こそ美事なり、話し替つて宗五郎無事に直訴も済みま
して、二百廿九ヶ村の者に安心爲せんご爲したるが却て我身の
仇となり、國表は茨臺親子諸共磔刑にかゝると云ふ、實に慙れは
次の段」

第十四

彌々無事に御直訴が濟まして宗五郎は江戸役人の手に預ると云ふ事に相成りました、公儀沙汰と相成つて、堀田上野之介本國の家老杉山彌正始めと致し町奉行田中惣左衛門郡奉行牧尾越後、其等に連りまする悪人ども追々御呼出しになり、天下御役人之を裁判、然に此時東國屋五兵衛の伴傳兵衛が萬事證據人となつて申し立て、悪人ども包みきれず自白いたす、依て皆切腹重追放と夫々罪の輕重極り、一時堀田家の領地は安泰に治ると云ふ事になりましたが、堀田上野之介殿は宗五郎を悉く憎ませられ江戸表御役人方へ對し、何卒宗五を御引渡し下されたいと願ひ出る、何しろ領地の百姓を領主より受取り度と云ふ事故拒むわけには參りません、コ、デ是非なく宗五を御渡しになる、宗五は國元へ送られて揚屋住居と相成りました

フシ「或日の事に堀田上野之介は家來の者を寄集めて種々様々の相談を爲され」

傍に控へられたる今の奉行高田源太夫と云へる者に對はれ

殿「宗五と云へる奴は實に悪き奴である二百二十九ヶ村の爲苦心なしたる段は天晴なるが、予の國元政事上の儀を江戸表へ訴へ出で堀田家へ耻辱を與へたるは憎き行爲之を重罪に行ひくれヨ、何か彼を苦めて殺すやうな手段は無か夫を申立てる者には五十石の加増をいたし遣はす、實に十五萬石の主人どもあらう身を以て仁慈なき言葉でムいします、是時に家來ども夫々君に申立ました、中にも高田源太夫は進み出で君に申し上ます、釜煎油煎背な立割鉛の熱湯を流し續ひては牛さき逆磔罪と云へるものは今まで有ふれたる事にムいします、今度拙者の考えますには、半を三つ並べて出来、其中央に宗五郎を入れ産れて間のなき三之助と云へる兒を宗五に抱かせ傍の半には女房おさん一人を入れ置、又一方には二人の兒を入れ置、二人のものは父母の傍へ寄りんとするも半格子あつて接近す、親は吾兒を招ばんとするも半格子有つて自由ならず、乳呑兒は乳房を探せども母は居らず、母は吾が兒に乳を呑せたとしと思へども半格子あつて乳呑兒を傍へ引寄る事はぬと云ふ、實に之に増苦

痛はムりますまいかと存じます、堀田侯御聞遊ばされ大に喜ばれ
鷹ウシ面白、五十石加増を得さする、早々取計へ心得ましてムいます、高田源
太夫其日は鼻を高して御前を退りました、

「替る話は岩橋村の宗五の自宅で御坐いまするが、無事に直訴
を済した上國元へ歸されしと聞いて喜ぶ女房おさん、モ一放免に
なる事かモ一御免しになる事か、夫ばかりを待受る折しもあ
れ表へ來たる役人ごもが」

役取調への筋があるから親子四人召捕に參つた、御繩を頂戴いたせ

「是は意外、妾は成程宗五の女房でムいまするが、此所に控へまする三人の兒は宗
五の兒ではムいません、勘當をされましたものでムいます、是此通り勘當状もムい
ますれば何卒一宜しく御調への程を願ひとうムいます

役「黙り居らう勘當いたしたなぞと云が、夫は私事であるぞ、御上の方には左様な事
は御届がないから、勘當を致したとは思はぬ、御繩を頂戴致せ、御用だ

「宜しゆうムいまする、夫では出る所へ出て申開を致しませう、子供に衣類を着
替て參りますから、其間御待下さいまし 役「早く致せと急立られ、二人の子供に衣
類を着替へ、其他産れて間のなき三之助にも同じく衣類を着替へまして、親子四人
が珠數繋ぎ、外面の方へ出んとする折りしも百姓どもは立塞り

御役人様へ、御令閨様と子供衆を何と爲さいます、無法な事を爲ないますと其儘に
は濟ませぬぞと云ふ聲をお三は聞て「ア一皆の衆、待て下さいまし、妾は御役所
に參つて言開をして夫の命を助て歸る心算でムいまする、御手逆へ爲すつては却つ
て宗五殿の爲になりませぬ、何か待て下さいまし、皆々様と止めまして郡奉行高
田軍太夫の白洲へ引れて參りました、御調へがあるかと思へば御調へもなく二の丸
に牢を出來まして其中へ入れる、宗五に三之助を抱せ、片々の牢には二人の子を入

れ置、一方に女房のおさんを一人入れる、

「其夜の事に成ますれば二人の子供は淋さに父や母やと叫ぶする、兄は兄たけ健氣にも弟喜六の頭を撫、必ず泣てはなりません、阿母ア様や父様が却つて辛苦思はれると云ふて聞せし其兄も涙を流して居たりけり、宗五郎は胸も張裂思ひ況て母親のおさんは我を忘れて泣伏した、我が身の乳は張て来る飲して遣たきは山々なるが、牢格子に隔られて傍へ接近す、さぞ飲たいであらうぞや、母も飲してやりたいぞやと、親子の者が、三の牢にて涙に咽ぶ有様は實に哀れに思はれまする」

此親子の心中は中々不辨な私が申し上げても盡ぬ事、諸君によく御推察を願ひまする、偕て其後半役人來たり親子四名を曳出す裸馬に乗て引廻しまする、佐倉

の御領地を廻はり廻つて茨臺に參りました、其時宗五夫婦の者は磔臺に縛られ、三人の子は蓮の上へ坐らせる、宗五は苦氣なる聲を發し

宗「御役人に御願ひでムいます、此子には何の罪もムいません、何卒御助け下さいまし 役「黙れ助ける事は相成らぬ、臨終に至つて未練な事を申すナ

宗「夫では彌々三人の子供等も御殺しなさいまするや、殺すならば私ども夫婦を先に殺して三人は後で御殺し下さいまし、御願ひでムいまする

役「イヤ、然でないぞ汝等二人に子供の殺されるを見せて置て、其後で汝等二人を殺してやる、高見より宜見物いたして居れと意地悪き役人どもが三人を打首に致しました、宗五の傍へ役人は槍を持って近寄、然るに宗五は衰弱の身体、目も明白ては見えませんが、無理に兩眼を睜つておさんの方を對

宗「女房、必ず死んでも死ぬではない魂魄は此世に残し、此無念を晴さで置ふや、

世の中の人に先立旅の空

迷ひの雲も今ぞ晴ぬる
おさんは聲ふるわせ

諸共にいざ越ゆかん死出の山

豫て契りし事を忘れぞ

哀れや辞世と共に宗五は四十三才、おさんは三十九才を以て、磔罪にかゝり黄泉の客と相成りました

『所へ指て先方より急ひで來たる一人は墨染の衣を、後方にて袖を結び合せ、跣足のまゝ宙飛如に駈來たる』

是ぞ餘人では無いと、宗五の爲には親類なる佛頂寺の光善和尚、其場へ走付て來た。光御役人に御願ひで云います、何卒三名の首だけ私に下し置れやうならば有難ふ存じます。高田源太夫聲張揚げ、運、黙れ汝のやうなものへ首を渡せるか、七日

の間晒し物にいたすのじや、兎や角云はずに歸れ。光夫では御願ひ申しましても其首は私に下さいませぬかと云ひながら光善が一足前へ出た時に、不思議なるかな、其時一天かきくもり雨がポツリ／＼降出し、見／＼内に篠を束ねて射が如く思はず知らず、高田源太夫後方をヒヨイと願向は宗五の死骸はチット目を開ひて白眼詰て居る、ハット源太夫が傍を見ると光善が、光首は下しおかれませんか。高田の顔を睨付て居る、流石の源太夫は身慄して、運、下て遣はす、首だけ持て退れ

光有難ふ存じますと光善が首を風呂敷に包み小脇に抱込で取て歸した我が御寺

『護摩壇の方に入り三の首をば護摩壇へ並べ七日七夜の間之へ籠て、他人の出入を禁じ、一生懸命に調伏の祈を掛けて居りました。此事を聞た役人が捨置ぬこ乗込んで來た』

一同打揃て寺へ押寄ると、光善和尚は三の首を小脇に抱込んで逃出す。役「ソレ逃すなど後方より追駈て参ります、光善は印幡沼へ参りまして、一足縮て光恨みを残してくれるぞよと云ふと、首を抱へたま、ザンブリと沼を望んで飛込ました、其時にはや一天曇り、アレヨと役人一足後へ下るトタン、水面へありくと現はれたるは光善、墨染の衣を着し、頭の毛は一寸以上も延。光如何に役人ども、假令此身は死するとも精神は決して成佛せぬぞ、今に思ひを晴してくれん

フシ「役人ごもは驚ひて、コワ大變ご其儘命からぐ逃出した儘て是より宗五の亡靈、續ひては女房おさんの一念、悪人へ崇をなす途に堀田侯の御前へ現はれる云ふ、怪談話に相成ります

第十五

フシ「悪盛んなる時は天に勝、天定つて人に勝、私慾に逆ふ高田源太夫、殿へ無用智恵を貸、五十石の御加増賜り、嬉やご榮耀榮華で其日を暮す、今日も今日こて奉行所にて無事に御役を勤めまして、家來を連れて役宅へ歸り来ります、其途中」

源「丹助や 丹へエ 源「モ一家へ戻りさうなものじやナ、餘程歩行たやうに思はれるではないか 丹「左様でムいます、私も左う思ひますが、何うしてコンナに今日は路が遠ひのでムいませう 源「不思議だノ、何でも二三里も歩たやうに思はれる、不思議じやナ 丹「左様でムいます、此時に源太夫がヒヨイと見ると、墨染の衣をつけたる出家が先に立てゐる、是ぞ光善でムいますスタくと前に立て道案内をいたして居る、驚ひた源太夫刀の柄に手をかけて 源「おのれ悪き奴迷ひ居つたかと斬込んだ

フシ「其時にカラ／＼と笑つて光善の姿は搔消如く跡方も御坐いませぬ」

身をふるわして源太夫は丹助を連れ、邸へ立歸つて参りました、奥様は御出迎をして

奥「御歸り遊ばせ、今日は餘程御遅刻の様に存じます 源「少々道で容子があつて

奥「左様でムいまするか、サ、御上り遊ばせますやう、御坐敷へ御通りになる御酒を召上りますか 源「今日は飲度ない、早く寝ると致さう、と其夜は何となく源太夫心持が悪ひから其儘床に入りました

フシ「夏の夜の晝の暑さは何所へやら、涼しき庭先の戸を開き、内には蚊帳を釣り、高田源太夫に女房のおその、悴源之助の三名が枕を並べて眠入ります、次第／＼に夜は更渡り、丑三ツの鐘の響

く頃、源太夫の女房はヌツクと起上り」

夫の顔をにらみつけ 女「コレよもや忘すまい、克ぞ吾々夫婦の者を苦め、其上ならす罪なき子供の命まで取り居つたナ、今ぞ恨みを晴してくれん、思ひ知れヨと、

飛び付来る、源太夫アツと驚ひて起上り、枕元にあつたる一刀を持って

源「おのれおさんと切つてかゝる、キヤツと魂消る聲、とたんに傍より宗五の長男宗平あらわれ 奥「思ひ知れやと傍へ寄る 源「ウ、おのれもかと同じく夫を切り拂ふキヤツと云ふ一聲、此の物音に驚ひて能々心を静めて見ますれば哀むべきや、女房おその我子源之助を手にかけて殺したり、アツと源太夫後にドツカリ打倒れる、是時に家内一同目を覺し奥の間へ馳付て参りました、

奥「旦那様何う爲さいましてムいしますと見ますれば源太夫立上り、血染の一刀を持って起上り 源「ヤイ源太夫、思ひ知つたか宗五の恨み之を見ヨと云ひながら、我と我手で咽喉へ突立て、ウーンと其場へ打倒れる、家内一同は驚きましてコハ大變と

騒ぎ立て

フシ『人を苦めなばまわりく〜て己も共に苦みに陥ることはこの事、悪人源太夫は其身を始め妻や子も冥途の旅と相成りました』

此方は堀田上野介、彼の高田源太夫に申付け木内宗五妻子を嚴刑に處しました、是にて鬱憤を晴したり、とお喜び遊ばしたが、或夜の事で、ムいしましたが、恰度九ツとも覺しき頃不圖目を覺され、御寢所をお出立になつて、厠にお出になる何にしろ十五萬石の殿様の事、便所に入らせられるにも御近侍が御附添申さねばならぬ、然るに此の夜は次の間に伽をして居りました近衆の方々も、何んもなく眠氣さして堪へがたく夫れへ打倒れまして寝入りしました故、殿様が厠に往くのお供に往くもの一人もない、夫故上野介様は便所に一人で御出になつた、用を達して出て居ら

せられると、椽の所へ一人の坊主が頭を垂れて居ります

上「コレ其方は何者じや、坊愚僧は佛頂寺の光善と申すものにムいます。」

上「光善、予は其方の名も未だ承はつた事がない、何用あつて當城中へ参つたと云

ひながら向ふを見ると、又一人頭を下げて居る者がある、是は出家ではムいません

鬘がムいまして、四十二三になる品の宜い男子、上「コレ其方は何者じや、

宗「私は公津新田岩橋村名主木内宗五にムいます、上「ウーン宗五郎か、何んではへ

参つた、宗「江戸表將軍家急に主君を御召に相成ります故、吾々二人御供を致し江戸

表へ主君の御出遊ばすやう、御出迎ひとして罷出ました、此時に上野介が前後を忘

れ氣が狂ひましたものと見へまして、上「左様か夫れは太儀である、速に江戸に参る

馬を曳け、宗「コレへ御出遊ばすやう、先に立た宗五郎に光善、厩に参りまして乗馬

を夫へ曳出し、直に上野介を乗せまして、光善と宗五の二人が従て、佐倉を立出江

戸を信じて参りました、其夜の曉方淺草黒船町の上邸に到着致しました、門の表へ

馬を止めた上野介、大音を揚げまして、上「開門致せ國表より只今到着致したゾ、
フシ「門番は何事ご心得、扉を開いて見ればコハ如何に、殿が馬上
で夫れに居らせられる」

驚ひて夫れへ平伏を致しました、上野介馬よりヒラリと下り

上「馬を頼むぞ、と云ひすて門内へ入る、早くも今一名の門番より此の事を告げま
したから、驚ひて御家來方が夫へ立出で、何か國に珍事出来したかと安き心もムい
ません、之を聞て家老の堀田式部、早速御前へ罷り出で

式「恐れながら御國表に何か騒がしき事でも出来致しましたか、上「ウーン、別段國
表に變りし事もない、式「して主君は何人を御供に御連れでムいます

上「オー宗五と光善の二人が予に申すには將軍家より御召故早速江戸表へ參れとの
事、夫故二人を召連れて參つた、式「是は思ひもよらぬ仰せ、宗五と申します者はお
國表に於て御召使に相成りまする御目見以上の御家來の内にはムいません、又光善

と云へる者も承はつた事がムいません、上「左様か宗五と申すは岩橋村の名主である
光善は佛頂寺の住職であるぞ、二人とも誠に忠義なものじや

式「是は怪からん仰せ、岩橋村宗五は先達て御所刑に相成りました、又佛頂寺光善
なる者は宗五の俗縁あるもので、印幡沼へ投身を致しまして相果しましたものとか
承はりました、此の世に居らぬものが御供を致す譯がムいません御心をお静め遊ば
しますやう、云はれて上野介始めて夢がさめたやう、四邊を頻りと見廻しまして
式部其方何用あつて國表へ參つた、式「ハ、お氣が付きましたムいますか此處は御上
邸でムいまして、主君が御國表より御出になつたのでムいます

上「何んと申す、予が國表より是へ參つたと御意にムいます、上「誰が供を致した
式「木内宗五に光善と申す者が御供の由只今主君が仰せられましたムいます

上「不思議な事があるものだナ、と流石の上野介が暫時言葉もなく下俯伏て考へて
居りました、云はれなくして江戸出府と申す事が公儀に知れば一大事、式部大層

心配を致しまして、殿様が江戸に参つたと云ふ事は決して口外をしてはならぬと人々に堅く申聞けました、其夜は御上邸で御寝みになつて居らせられました、真夜中にも思しき頃不圖目をさまして

上 誰ある参れ ○「ハア、襖を開き

フ「次の間より立出ました二人の者は、木内宗五に光善なり」

此の二人を見ると又むらくと氣が狂ひました上、オー宗五に光善か、能く参つた

宗直ちに御登城を遊ばしますやう 上 左様か 宗 上様御待兼でムいます

上 馬を曳け 宗 是へ御出遊ばしますやう、又麻に案内をして、殿様を馬に乗せ光善に宗五が先に立て淺草の上屋敷を立出でお城をさして参りました、大手まで來ると二人の姿が消えてしまふ大手を堅めた役人驚ひた、何んであるかと調べると堀田上野介全く是は發狂を致したものであらふと直に堀田家へ沙汰をする、堀田式部夫

へ駈け來つて殿様を屋敷にお連れ申したが、夫れからは後は愈心狂ひ、御家來を見ると宗五郎に見へる、夫故御手討に遊ばすやうな始末、昔時徳川の掟として大名が氣が違へば、家は改易、早くも此の事

フ「四代將軍家の上聞に達し、既に堀田家御取潰し、並に上野介儀切腹申付宜らふ、この御沙汰」

然し上野介は發狂致したにもせよ、堀田加賀守紀正盛と申す者は三代將軍薨去の節、殉死致したる天晴忠臣、殊に上野介とは違ひ、中々の人物でムいました、此の功を思召して將軍家も堀田の家取潰すも不惑と思ひ、ソコで上野介には切腹の御沙汰が下りましたが、其家は御子息の豊松君をもちまして相續を爲せる事になつた、然し十五萬石は僅に一萬石に滅地され、江州宮川を下し置れました、偕て此方は下總印幡郡佐倉城付二百廿九ヶ村の者、宗五の爲に無事に治り誠に有難ひ事であると東勝寺に宗五親子の靈を祀り、未だに残る宗五神社、永らく申上げました佐倉義民

傳の御話^{でんのおはなし}は是^{これ}を以^{もつ}て終^{をり}と致^{いた}します、又々^{また}愛願^{ひいき}を願^{ねが}ひまする



佐倉義民傳終

明治四十三年四月九日印刷
明治四十三年四月十三日發行

定價金二十五錢

不許複製

講演者 京山隅右衛門

編輯者兼 神谷竹之輔
東京市芝區三田三丁目七番地

印刷者 菅井十一郎
東京市神田區松住町五番地

發行所 三芳屋書店
東京市芝區三田壘坂
振替東京壹壹壹六

武士道鼓吹者桃中軒雲右衛門實弟風右衛門講演

日本鍛冶名譽の切味

正宗孝子傳

四六版全壹冊
本文講讀付
長價金貳拾錢
定價金貳拾錢
郵税金四錢

名刀番附の東の大關たるべき五郎正宗が其譽れの切味は、世既に知る處である、が、其打下す槌振の什麼であつたか、亦其人爲の什麼であつたかを克く知る者は蓋し此講演者桃中軒風右衛門と茲に此本を求められる

讀者諸君の他には無い。

實に此名鍛練師正宗は昔に其人爲のみにして觀るも亦天晴れ人道の龜鑑である、繼母が邪見を笑顔に仕へる眞實一筋、百難萬障時に死に望むも撓まぬ其孝心は如何で凡人のなし得様か、爾して初めて神宿る名刀も打上げられるのである。

亦演者風右衛門は浪界の霸王雲右衛門が實弟にして時に阿兄を援く妙手である、其名刀と名節は相俟つて如何に面白い事であらうか、敢て出版者が自慢する處である。

龍甲齋雀堂講演 卷頭寫真版〔講演者と田宮神社、故五代目
菊九郎及尾上梅幸兩優のお岩

四谷 お岩 稻荷の由来

四六版全一冊
紙員貳百五十餘頁
本文ふし付長講讀切
特價郵税共金三十錢

四ツ谷怪談と云へば恐い嘶の大看板、雀堂と云へば當時浪花節の眞を語るたつた
一人、茲にお岩様が怨みの一念は凝つて、其名入雀堂の講演に現はれる、浪花節
怪談揃の第一編、節廻しまで一々念を入れた上手の速記に、落語講談の其れと
また趣き代へた持味を遺憾なく語り盡す、面白いの、物凄いの怨み重なる田宮伊
右衛門……オツソレ出たぞ評判く

武士道 桃中軒雲右衛門實弟風右衛門講演
鼓吹者

雪の曙 義士本傳

紙數三百餘頁
寫真版數葉挿入
定價三十五錢
郵税金六錢

【内容】

(本文ふし付)

●發端、勅使下向●及傷原因●殿中及傷●田村邸切腹●早打●御金配當、探り
評定●城渡し、大石儀作助●大石江戸探り●清水一角召抱へ●猿橋右門の器量
●山科妻子別れ●天野屋利兵衛●大石祇園の遊興●大石東下り●泉岳寺最後の
評定●南部坂雪の別れ●伊庭如水軒●如水軒召抱へ●岡野包秀繪圖面取り●及
傷の遠因●梶川大力の粗忽●小林平八郎傳●藝州公御前試合●義士勢揃●横川
勘平驅付●吉良邸討入、松浦の太鼓●堀部彌兵衛驅付●清水一角の最期●伊庭
如水軒義心●小林平八郎討死●義蕪本懐を遂ぐ●高田軍兵衛切腹●泉岳寺引
揚、四家お預け●毛利小平太傳●丹頂の鶴夢物語●十八ヶ條申開

浪界諸大家競演 井川洗屋畫

雪の曙 義士外傳

全一冊

紙數三百餘頁
口畫三色版
定價金三十五錢
郵税金六錢

演題

彌作の鎌腹

武士道鼓吹者

桃中軒雲右衛門

天野屋利兵衛傳

一心亭辰雄

丸津田越前守傳

鼈甲齋鶴堂

鐔屋宗伴傳

早川辰燕

小山田庄左衛門傳

末廣亭清風

忠僕元助傳

末廣亭清風

青墓貞宗の由來

東家樂燕

高田軍兵衛傳

京山幸玉

大石良雄鯉魚之一軸

中川末吉

出演者は如何なる競演をなすか!!

關東關西 浪花節大集會

全一冊

紙數二百餘頁
寫真版挿入
定價金四錢
郵税金四錢

出演者

玉川勝太郎、東家樂遊、京山恭爲、吉川清之助、三升家一儀、鼈甲齋虎好、浪花亭重治、外數名

ふし付

浪界諸大家競演 井川洗屋畫

雪の曙 義士銘々傳

全一冊

紙數三百餘頁
口書三色版
定價金三十五錢
郵税金六錢

演題

武士道鼓吹者

神崎與五郎傳……………桃中軒雲右衛門
赤垣徳利の別れ……………吉田奈良丸
勝田新左衛門傳……………早川辰燕
岡野金右衛門傳……………春日亭清吉
堀部安兵衛傳……………吉川清之助

大石瀨左衛門傳……………龜甲齋確堂
杉野十平次傳……………浪花亭重勝
大石妻子別れ……………三升家一俵
大高源吾傳……………東家樂遊
間十次郎傳……………二代目辰丸

●本文ふし付 ●各講演者寫真版入

浪花亭峰吉講演
三升家一俵

浪花節十八番

各講演者寫真版挿入 本文ふし付

(内容)
●豊臣昇進録
●伊賀の水月
●橋隨院長兵衛
●花川戸助六

全一冊 定價金二十錢
郵税金四錢

浪界諸大家講演

(講演者寫真版挿入)

浪花節大會

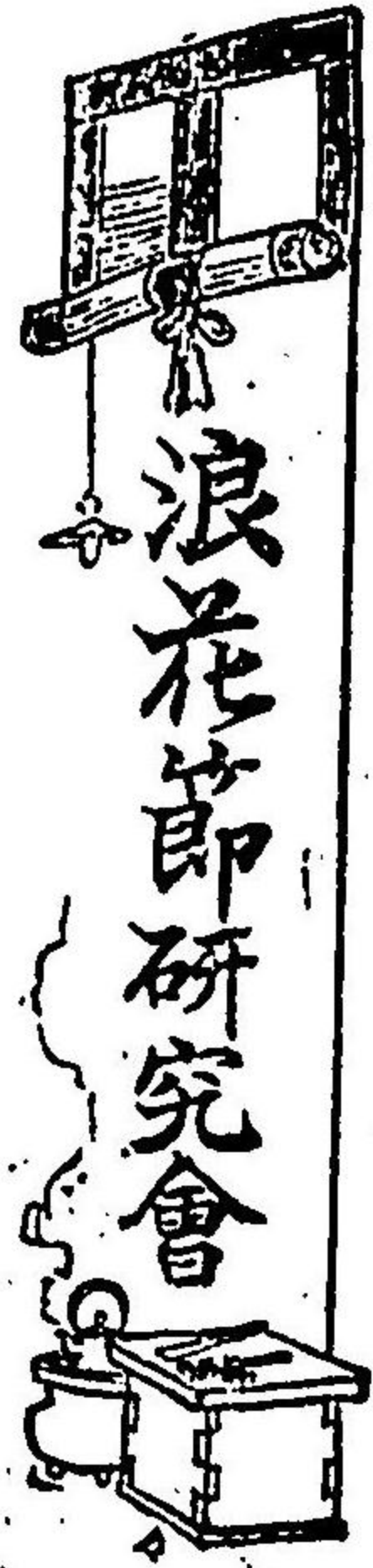
送定紙全
料價員金二一
金四廿百
錢錢頁冊

(演題)

- 大石内藏之助……………雲右衛門
- 赤垣源藏……………辰
- 紀文大盡……………三
- 一休蟻川問答……………大
- 戸村丹三郎……………峰
- 玉菊燈籠……………蓉
- 安中草三……………虎
- 丸
- 毛谷村六助……………虎
- 寛政力士傳……………虎
- 日露戰爭……………虎右衛門
- 鹽原多助……………小
- 大久保武藏鏡……………圓
- 名物隅田川……………圓
- 本文ふし付
- 好
- 吉
- 門
- 福
- 車
- 車

浪界諸大家講演

(講演者寫真版挿入)



本送定紙全
文料價員
ふ金金二一
し四廿百
付錢錢頁冊

(演題)

- 木村堪忍袋……………辰
- 慶安太平記……………善清
- 敵觀音丹次……………善清
- 島田義民……………善清
- 佐倉兵衛……………善清
- 牧野彌兵衛……………善清
- 辨天春……………善清
- 白石……………善清
- 燕吉
- 風
- 確
- 門
- 好
- 遊
- 平
- 若
- 燕
- 田宮孝子……………若右衛門
- 紀文出世……………三
- 伊井直人……………峰
- 小栗判官……………虎右衛門
- 高田赤馬……………清之助
- 滑稽西……………繁次郎
- 天宗孝子……………滔
- 正宗……………風右衛門

中央新聞主筆 玉木椿園君序

二十 三 義士の遺物

前編紙員 定價金四十五錢 後編紙員 定價金四十錢
三百餘頁 郵税金八錢 二百六十餘頁 郵税金六錢

本書は武士道の花と謳はれし赤穂四十七士の泉岳寺に在る寶物に就て御
前講演の名譽を賜はりし初代桃川如燕翁の講演になりしもの幸に一讀を
賜へ

前編 【内容】

- 大高源吾の遺物
- 村松三太夫の遺物
- 倉橋傳助の遺物
- 岡野金右衛門の遺物
- 潮田又之丞の遺物
- 大石主税の遺物
- 神崎與五郎の遺物
- 原總右衛門の遺物
- 勝田新左衛門の遺物
- 赤垣源藏の遺物
- 不破數右衛門の遺物
- 寺坂吉右衛門の遺物
- 天野屋利兵衛の遺物

後編 【内容】

- 堀部安兵衛の遺物
 - 前原伊助の遺物
 - 近松勘六の遺物
 - 横川勘平の遺物
 - 依星玄蕃の遺物
 - 千馬三郎兵衛の遺物
 - 服部右内の遺物
 - 村松喜兵衛の遺物
 - 片岡源吾右衛門の遺物
 - 大石良雄の遺物
- 各卷 泉岳寺
寶物 寫真入

小金山井蘆州遺講

全一冊
三百五十餘頁

義經

小堀頼音君書

定價金四十錢
郵稅六錢

講談は戦ひを語るべく世に生れた、然らば講談の真味は修羅場にあると言つて可い。

義經は戦ふべく世に生れた、然らば義經の一生は修羅場にあると言つて可い。

故人小金山井蘆州は軍談讀として世に生れた、然らば蘆州の妙所は修羅場にあると言つて可い。

茲に其講談の真味たる修羅場は、蘆州の妙伎に據て戦ふべく生れた其義經の一生を講ずる。

一世の武將が軍扇と、一代の名人が張扇は、蓋し稀代の珍品である事言ふまでもない。

故人桃川實講演

水戸黄門漫遊記

全三冊讀切
紙員六百頁
郵稅共金五十錢

「潮來出しの真菰の中に、菅浦咲くとはしほらしい」と此俗語から何時も聯想するものは、當時天下の副將軍たりし水戸西山公である、水戸藩士が分けても文學武術に秀でたること、維新の際慷慨の烈士が多く水戸藩から出たこと、これ等は皆西山公の遺物として見る可きもの、西山公は隠居した後の號で、水戸黄門光圀卿と云へば既に其名を知らぬ者は無からう、一代の經歷は英傑の士に依つて感深きものを況して光圀卿は天下の副將軍となり夙に勤王の志を懷き、治國平天下の奇才を揮はれしものなれば、興味座るに當年を偲ばしむる事は改めて謂はずもがな、事、隠居の後一名士を従へ天下の政況を視察された奇聞は演者の特技であれば、實の十八番は此處だなど喝采の起る事を保證して、此一項は特に御披露致します

無漏道人編 高須梅溪序

漫遊國一休禪師

冊一全

紙員四百六十餘頁
口書寫真版
定價金四十五錢
郵税金六錢

本書は禪師の年少より説き起して高僧の各天下に鳴る迄の奇行を輯めしものなり

雨柳子作 東京二六新報連載

糸の平内

冊一全

紙員四百二十頁
口書コロタイプ
定價金四十五錢
郵税金六錢

浅草観音前に石像を安置し常に人の参拜絶へざる糸の平内とは如何なる人なりや
本書に依りて此奇人の一生を知り給へ

滑稽落語會

入挿版真寫者演講編每●冊二十部全

落稽ふいやは而害かのり戯をけが之れ締て欺りに垢る笑
す手。ふ小。非し。徳。を洗と動なざり大れ狂。か。ふ。
さ彌狐猫な却文人まで大落つない讀。を本は讀大去洗門
馬。のいらて學むけはなすてりては稽失な。づはるふに
がは結ふす無に戯さあるこ。膝。健。よふ鼻頭でぞ。髪は
云なふ杓と用比まてる説。味心康腹き本のが此に據に福
ふす子。のする世ま落妙噂ののの程も下外奪。はばが
とるい應用れ似をい稽なの垢助皮にあのれに餘ど頭來

●禽 柳 文 圓 圓 左 小 小 圓 三 圓 遊 會
語 樓 枝 遊 治 藏 喬 樂 朝 左 遊 遊 會 會
落 落 落 落 落 落 落 落 落 落 落 落 落 落 落
語 語 語 語 語 語 語 語 語 語 語 語 語 語 語
會 會 會 會 會 會 會 會 會 會 會 會 會 會 會

紙員壹冊二百餘頁
定價各冊金廿五錢郵税金四錢

御送金は無料でお出しなす

郵税無料通信送金法

当店へ御注文の節、最も軽便にて、最も安全に、御送金下さるには、振替貯金拂込書の拂込票と、拂込通知票との※のある處へ、御自分の名前と金額と日付けとを、夫々御書入れになつて、金子と共に最寄の郵便局へ御持参になりませければ、郵便爲替料も書留料も要りませんで、すべて無料で當店へ届きます。尤も金員の受取證は郵便局で直ちに渡します。

今假りに、郵便爲替にて金五圓を當店へ御送金になります場合は、爲替料三錢外に郵便書留料と郵税とで十錢、都合十三錢かゝりますが、右の法で御遣しになれば壹厘も要りませぬ。

尙ほ拂込通知票の裏の欄内には、御注文の用向でも、御送金の説明でも、何事でも御随意に御書き入れ置下されば、其儘當店へ届きます事故、早速御申付通りに取計ひます。(但し拂込通知票の裏面に御用向を御書入の上は、更に同じ事柄を別に手紙にて申越されする必要はありませぬ)此拂込用紙は何處の郵便局にても御渡し申します。其の節には必ず當店の口座番號(東京一一一六番)と店名三芳屋書店とを間違わなるように階書にて御書き入れの程を願上します。

259
1073

东京

三上しん

花

